
IN BLOOM ~聖少女と黒の英雄~ 番外編集

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IN BLOOM ~聖少女と黒の英雄~ 番外編集

【Zコード】

N8151T

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

完結作・IN BLOOM ~聖少女と黒の英雄~ (<http://nocode.syosetu.com/n6749q/>) の番外編集です 11月8日 日常編その8をUPしました。

その1（前書き）

ヴァルグランデ編・第十六話～十七話間のお話です。十六話までの
ネタバレ含みます。咲良視点、緩いラブコメ傾向。

俺がこのアルグランデ軍の砦に滞在するようになつて、幾日か経つ。

エドワードは、噂はすぐに消えると言つていた。確かに人の噂も七十五日と言う。だが残念ながら、まだ七十五日も経つてない。七十五日は結構長い。消えるまで俺はどこにいればいいのかと云ふと、居場所はなくて。

なんだかんだ、俺はずっとエドワードの部屋にいる羽目になつてゐる。いや、もちろん嫌というわけではない。ないのだが。「咲良、いつまでそんな所で夜明かしするつもりだ？ 奥を使っていいと言つていてるのに」

今夜も部屋の隅で毛布を抱えてうすくまる俺を見下ろし、エドワードが呆れたような声を落とす。けど呆れてしまふのは俺の方だ。彼女はよく、こんな不得体の知れない男と同じ部屋で眠る氣になるよ。警戒心が薄いのは強さを伴つてゐるからだろうけど、これじゃ氣を遣つてる自分が馬鹿みたいである。

「エドワードこそ、いつまでソファで寝る氣だよ？ 俺はここでいいんだよ！」

エドワードは俺が頑固だと云いたいんだろうが、俺に言わせれば頑固なのは彼女の方だ。そもそもここは彼女の部屋なんだから、その持ち主であるエドワードがベッドを空けなければならぬ理由などどこにもないのである。ましてや、彼女は女で、俺は男だ。……いくら見た目が逆であろうとも。

「女の子ソファで寝かせて、俺がベッド使えるわけないじゃないか！」

そんな俺の主張に、エドワードは片手を腰に当て、少し複雑な顔をした。

「私はもう随分前に女を捨てた。今更そんな気を遣つて貰わなくて

結構だ

「そんなこと言われても、俺の気が済まないの」

「年下なんだから、素直に甘えたりいの」

まるで駄々っ子を相手にしているかのように、はあ、とHドワードが疲れたため息を吐く。ひとつしか違わないのに、そんなあからさまな年下扱いは心外なのだが、それを怒れるような立場にもない。行き場所のない苛立ちと共に俺は立ち上がる、Hドワードの手を掴んで奥の部屋へと引っ張った。

「咲良？」

「いいから、Hドワードは、ちゃんとベッドで寝てくれよ。」

そして、無理やり彼女を奥の部屋へと押し込み扉を閉めようとしたのだが、今度はHドワードが俺の手を掴んでそれを止めた。

「……今宵は冷える」

そんなことは、俺だって一緒に気温を体感してるわけだし解つてる。毛布を被つても肌が冷氣を感じるほどだから、寒さに強いとか弱いとかの問題じゃなく今夜は寒かった。だからこそHドワードも俺に声をかけたんだろうが、俺が引けない理由だつて同じだ。

「……だから、ソファで寝るのはやめろって」

いつもなると意地の張り合いである。しばし俺たちは睨みあつていたけれど。

先に目を逸らしたのは、Hドワードの方だった。勝った、と俺はよくわからない勝利の余韻に浸っていたのだが、それには少し早計だった。

「わかった。それなら、一緒にベッドで寝よう

とんでもないHドワードの一言に、俺の思考とか動きとか、色んなものが停止する。そんな俺の手を軽く引いて、彼女はこちりへと視線を戻し。

「そうしたらきっと温かい

顔を近づけて、俺の鼻先に囁きかける。

「え……えええ！？ えっとあああの、ええええ、うえ、あ、おお

「おおッ……」

何を言おうとしたにも意味のない呻きにしかなり、完全に余裕を失った俺は必死でエドワードの手をふりほどくと、無我夢中で扉を閉めた。それだけの行為が百メートル全力疾走よりも疲れて、すると座り込んでゼーはーと荒い呼吸を繰り返す。だがようやくそれがおさまると、扉の向こうでエドワードがくすぐすと笑う声が聞こえてくる。

「遊ばれた。そこでやつと氣付く。

「エドワード……」

「言つたことを聞かないからだ」

つづくまりながら、恨みがましい俺の声は扉の向こうの彼女にも届いたらしく。してやつたりといつ声が、扉を通して返ってきた。

「……風邪を引くなよ、咲良」

笑い声はしばらく続いていたけれど、やがてそれは穏やかで優しい声へと変わる。そんな声を出されちゃ怒れもない。結局、苛立ちもしてやられた悔しさも、それで全部溶けてしまつんだから彼女には勝てない。おやすみと呟いて、俺は毛布を手繕り寄せる。

「……今日は寝つこの指定席ではなく、ソリで寝るわ。

今日は朝からやけに暑い。と思つていたのに、さつきから妙に寒い。そのくせ汗が出て、頭がぼーっとして、体の節々が痛い。

「これは、もしかしなくても。

「咲良、朝から気になつていたんだが、もしかして」

俺が気付いた辺りで、エドワードも気付いたんだろう。だが、彼女が手を伸ばすのに気付き、俺は咄嗟にそれを避けてしまった。

「……」「……」

まるで弟さんのようこ、エドワードが眉間に皺を寄せるのを見て身構える。そして軌道を変えて向かつてくる彼女の手はさつきより早くてよけ切れず、思わず掴んで止めるが、逆に掴み返され捻り上げられた。

「私に挑もうなど百年早い」

そういう言葉は、彼女が言つとひびく様になる。ああ、勝てるなんて思つてません。ただでさえ勝てないのに、こんなへろへろじや抵抗ひとつ試みることすらできやしない。だが諦めて大人しくなつた俺の額にひやりとした感触があると、その後に自由は返つてきた。だがもう今更取り繕う意味もなく、そうすると意地を張ることすら困難になつて、俺はその場に崩れ落ちた。

「酷い熱じゃないか。何故黙つていた」

「……さつきまで、平氣だつたんだ」

ゼーゼーと息が切れる。それすら堪えられなくなりつつも言つた言葉はほほ嘘だった。

だつて、それがばれてしまえば、彼女はきっと。

「言わんことない。だからあれほどベッドを使えと言つたのに」

言つと思つたよ。だからどうにかやり過ごうと思つたんだが、それにはさすがに熱が上がりすぎた。朝の時点では、大人しくして

ればなんとかなると思つたんだけどな。しかしこの分じゃ、今夜からは俺の言い分は通らなそうだ。それでも一応は抵抗してみる。

「でも、そしたらエドワードが風邪を引いていたかもしれないじゃないか」

「生憎だが、そんなヤワな鍛え方はしていない」

……さいですか。なんとも逞しい。

俺だつて別に病弱じゃないけど、年に一回くらいは熱を出す。そしてそのたび、馬鹿でも風邪引くのねーと姉ちゃんに野次られる。確かに俺は馬鹿だけど、だったら風邪を引かない特典くらい欲しいで、これでも体を鍛えてるつもりだ。でもやっぱ彼女のそれとはレベルが違うんだろうとは思うけど。

抵抗する術を失くした俺は、黙つて彼女の肩とベッドを借りる以外の道も一緒に失くした。それ以降は、術があつても実行できなくらいに衰弱してしまった。食事も受け付けないし、声を出そうと思えば咳が出る。こんなに酷いのは、さすがに小さい頃以来か。とにかく寒くて気持ち悪い。

でも悪化するのも無理はない話だ。

元の世界なら、調子が悪ければ医者に行き、注射の一本でもして薬を飲んで、あつたかくして寝てればそうそう何事もない。けどここに病院はない。医者がいるのかどうかは知らないが、いたところで、魔女疑惑のかかつた俺を果たして真撃に診てくれるかどうか。薬は、熱さましの効果があるっていうものは貰つたけれど、効果の程は謎だ。今のところ効いてはいない。そして、何より寒い。エドワードの分の毛布まで使つてゐるのに全く温かくない。当然だけど、ここにはエアコンもストーブもない。

家なら、その両方ある。母さんが消化にいいもの作つてくれて、野次りながらも姉ちゃんが水とか持つてきてくれたりする。

そんな環境に改めて感謝したことなんてなかつたけど、俺は随分恵まれた場所で暮らしてたんだな。こんなときになつてそれを知つた。

夜も更けて、寒さはますます厳しさを増す。
ここは寒い。

帰りたい、な。

温かい家を、朦朧とする意識に思い描いたそんなとき。
実際に体が温かくなつた気がした。

幻想で温かくなるなんて、いよいよ俺はやばいのか　　、そう思
いつつも温もりは心地よく、ようやく深い眠りに落ちることができ
た。

夢ひとつ見ない、真っ暗で深い眠りのあと。

気がついたら、すでに明るかつた。朝になつたせいか、それとも
熱が引いたのか。あんなに辛かつた寒さはもうなくて、ベッドの中
でほつと安堵の息を吐く。ピークは過ぎたみたいだ。

そうすると、多分昨日はソファで寝たのであるう、エドワードのこと
が気になつた。昨夜は人を気遣う余裕もなかつたけど、今日は
もう大丈夫だ。慌てて彼女を探そうとして　　そこで俺は凍りつい
た。

「……な、なななつ、」

なんで、と。誰に聞いているのかなんの意味があるのかわからな
い言葉を繰り返し。そんな俺の声で、群青の瞳がうつすら開いた。
俺の、ほんのすぐ、真横で。

温かくなつたのは、幻想でも氣の所為でもなかつたらしい。けど
その温もりの正体を知つて、引いたと思つた熱が昨日以上の勢いで
上昇していく。

ほんの僅かエドワードが動き、それだけで額に彼女のそれが重な
る　元々そんな至近距離だつたのに、これで距離はゼロになる。
「良かつた。引いたな」

間近で微笑みかけられて、だけど俺はそんな彼女を思い切り跳ね

のけて起き上がる。随分な態度だと自分でも思つたけれど、取り繕うような余裕はなかつた。

「無理をして起きるな。まだ少し熱い」

なのにそんな俺の態度にもかかわらず、Hドワードの声は笑いを噛み殺していた。だからきっとバレている。

その熱は、風邪のせいじゃないってこと。

「……水」

無愛想な俺の声に、Hドワードは返事をしてベッドを降つねり、くすくす笑いながら部屋を出でこつた。扉の閉まる音に、呑むやくへしゃひゆ、と音が聞こえた。俺は息を吐き出す。呼吸すら忘れてた。

「ここには何もない　なんてことせ、なくで。

ベッドにはまだ温もりがある。それはきっと、Hアコノヨリストーブより温かい。

医者も薬も、栄養のある飯がなくても、この世界も悪くないなんて思うあたり、俺はとっても現金だ。すっかり軽くなつた体を動かしながら苦笑を零す。

戻つてきたら、礼を言わないといけないな。

そんなことを思つ俺の耳にはもう、小走りにいらっしゃる足音が聞こえていた。

「Jの世界」というか、Jの国に四季があるのかどうかは知らないけれど。日本の冬くらいには、ヴァルグランは寒かつた。

「ここって、寒いよね……。いつもこうなの？」

俺の何気ない間に、エドワードがこちらを向く。

「まあ、近頃は少し冷え込むが。大体いつもこんなものだ」

「そうなのか……。夏が好きな俺としては、それは遺憾だ。寒いのはあんまり好きじゃない。そんな俺にとつてみたら、エアコンもストーブも、こたつさえもないこの世界はやっぱり厳しい。防寒具が毛布一枚といつのはなんとも心許ない。

「寒いのか？」

「少しね。ストーブとかあつたら嬉しいんだけど」

「すとーぶ？」

「うん、ないよね、わかってた」

妙なイントネーションで返してくれるエドワードで、Jの世界にないものを口にすると、彼女は大抵そうやって反芻してくる。俺は少々肩を落とした。ストーブは無理でも暖炉くらいないものかだが、この部屋に火を焚くような設備がないのは見ればわかることがある。まあここは娯楽施設でも民家でもないし、命に関わるとか凌げないほど寒いわけじゃないからそれも仕方ないんだろう。充実した暖房設備に囲まれた、現代っ子の俺がひ弱なだけで、そんな俺の考えを肯定するように、エドワードが口を開く。

「Jの皆は大きい方だが、所詮は攻防用の皆だからな……、確かに過ごしやすくはない。不便をかけて済まぬ

「いいよ、我慢できないほどじゃないし」

エドワードが済まなそうな顔をするので、俺は慌てて両手を振った。それは解っていたし、エドワードに謝られるようなことじやない。大体、彼女が平然としているのに、俺が寒いとか言つてちや駄

日だ。我慢の子になる決意をしてこむと、ふとHドワードの皿つかが変わった。

「なんなら、今晚も一緒に寝るか？」

「いや、いいです！」

そんな申し出に、俺は振つていた手の勢いをせりに強めて悲鳴のよに叫ぶ。からかわれてるのは解つてゐけど、俺も単純なのでいちこち動搖してしまつ。案の定くすくすと笑われて、俺は熱くなつた顔を隠すように背けた。このところ、エドワードは俺をからかつて遊ぶのを楽しんでいる気がする。たつたひとつ年上なだけで、ずいぶんと俺を年下扱にしてくるし。

「いや済まん。可愛いからついつい」

「……それ、フォローになつてると思つてる?」

「やつ怒るな。寒いなら暖を取る方法はあるぞ」

俺が怒つても彼女は全く困つてはくれない。むじろ益々楽しそうに笑うのである。すつかり玩具にされていふことにむくれていると、彼女はそんなことを言つて立ちあがつた。そして、部屋の隅から瓶を一本手に取つて戻つてくる。まさか、それつて……

「呑めば温まる」

「いやいや。俺未成年だし」

やつぱり酒か。だがそんな俺の声に、Hドワードは首を傾げた。

「確か咲良は、十六と言つていなかつたか?」

「う、うん……」

「ヴァルグランデでは十五で成人だ。それに、酒で暖を取るのに歳は関係ないだろ?」

そんなものか……、そりや日本の常識で話しても仕方ないけど。でも酒はなあ……。一度父ちゃんと呑まされたことがあるけど、一口でぐらぐらして倒れるかと思つた。おまけに次の日死ぬほど気持ち悪くて学校も行けなかつたし。以来、さすがに父ちゃんも俺に呑ますことなくなつた。

「でもやつぱり酒はやめとくよ……。俺、弱いんだ」

「だが、寒いのだろう?」

断る俺にお構いなく、エドワードはグラスに酒をついで、自分でその中身をあおる。一気に干してしまっても、彼女は顔色ひとつ変えず平然としていた。

「そう強い酒ではない。いくら弱くとも一杯くらいでは酔わぬだろう」

「う……」

「それとも、やはり一緒に寝るか?」

「いただきます」

何かうまいこと手玉に取られている気がするんだけれども。そう言われて俺は思わず彼女からグラスを受け取つてしまつた。量はさつき彼女が飲んだ量の半分程度だつたけれども、匂いだけで頭が痺れる。本当に軽いのかと一抹の疑問が頭を過ぎつたが、目の前で一気飲みした彼女が平然としているのだ。ここで呑まなきや男が廃る。……というわけで、俺は覚悟を決める。グラスの中の液体を一気に胃に流し込んだ。間髪入れず、焼けるような熱さが俺の喉と胃を襲う。こ、これ絶対軽くない!

「な、大したことないだろう。温かくなつたか?」

笑うエドワードの姿がぐにゃりと歪む。……なんで彼女は何ともないんだ。

何一つとして彼女に勝てないことが無償に悔しくなつてきて、俺は力が抜けそになる足を踏ん張つた。汗が滲むほど体が熱くて、上着を脱ぎ捨てながら、エドワードの方に歩き出す。

「さく」

何か言いかけた 多分、俺を呼ぼうとした彼女の声が途中で途切れたのは、俺が突然掴みかかったからだろう。ついでに、小打ち刈りの要領で足をかけると、余程呆気に取られていたのか、あつさりと彼女はバランスを崩して、俺の狙い通り後ろにあつたソファに背中から倒れる。

「……まださむいから、」

すかさず被さるようになにに押さえつけられると、俺はつまへりせつが回らない口を動かし、大ウソをついた。

「あつためて」

途端、酒を一氣にあおつてもまるで変わらなかつたエドワードの顔が、耳まで真つ赤になる。

勝つた。今度こそ勝つた。

心地よい勝利の余韻に浸つた瞬間、俺の意識は暗転した。

ふと田覚が覚めたら、ものすごく頭が痛かった。

酷い頭痛と吐き気に襲われながら、何があつたのか必死に思い出す。それでエドワードに勧められるまま、酒を一気飲みしたことを思に出した。どうやらこれは、曾父ちゃんに呑ませれたときと同じ「一田酔」というやつらしい。

しかしそこまでは思ひ出せても、どうにも呑み干した後のことを見出せないのである。

いくら考えてもどう頑張つてもまるで思い出せないので、エドワードに聞いたら無視された。……たつたあれだけの量の酒で倒れたりして、さすがに呆れられたのだらうか……。

しかし不思議なことに、エドワードが俺をからかつて遊ぶことなくこの口を境に激減したのであった。

「…………」Hドワードがうぐくに話をしてくれないので、俺はなんとなく気まずい日々を過ごしていた。

一度、俺が酒を飲まされて、ぶつ倒れた日からだ。

愛想を尽かされたのかとも思ったのだが、過保護なのは相変わらずで、部屋を空けることはあまりない。だけど、一緒にいる分だけ、このどこか気まずい空気に俺は耐えきれなくなってきた。

間がもたなくて続けていた素振りが本日十回を数えたあたりで、刀を下ろして汗を拭う。

「…………あのさ、Hドワード、」

意を決して、窓辺で本を読んでいたHドワードに声をかける。……いや、多分読んではいないんだけど。視線はずっと窓の外に向いていたし。と思って、素振りしながらずつと彼女を見ていた自分に気付いて、何か恥ずかしくなる。だが、その視線が外から俺に向くのを見て、俺は慌てて言葉を継いだ。

「あー、あの。何か怒らせたなら『ゴメン』」

とにかく、あの日からエドワードの様子が変わったことには間違いない。恐らく俺が原因なのだろうから謝ったのだが、彼女は怪訝そうな顔をしただけだった。

「何故、そんなことを？」

「だ、だって。怒ってるだろ？ 最近あんまり口あひてくれないか

ら……」

おずおずとそいつ言いついと、Hドワードは少しあく息を吐いて、読んでない本を閉じた。

「別に、怒つてはいない」

「ならないんだけど……」

だけど、やっぱりそれきり会話は途絶えてしまう。いや、前だって四六時中話していたわけではないから、気にする俺がおかしいの

かもしだいけれど。それでもやつぱり氣まずいと感じてしまつて、俺は無意識のうちに話題を探していた。

「そういえば、いつも何読んでるの？」

俺が素振りをしている間、エドワードは本を読んでいたことが多い。ふと気になつて聞いてみると、エドワードはそのとき初めて本の存在を思い出したように、膝の上に手を落とした。

「……ああ。別に何つてほどでもない。ただの大衆本だ」

「そんなんだ。つまり戦術書とかかと思った」

「期待に添えなくて悪いな。これは今本国の貴族の間で流行つている恋愛小説」

それは意外。意表を突かれた俺が目を丸くしていると、エドワードはふつと声を立てて笑つた。

「似合わぬか？」

「あ、いや。そんなことは」

「戦術書の方がお似合いだと顔に書いてあるぞ」

「……そんなことないってば」

弱々しい俺の反論に、またエドワードは笑つた。似合はないともでは思わないけど、意外だつたのは本だから何も言い返せない。でも、とにかくエドワードが笑つてくれたので、それには少しほつとしていた。

「……面白いの？」

聞いてみると、エドワードは笑いをおさめて、少し困つたような顔をした。ああ、そういえば読んでなかつたつけ……。

「まあ、興味はあつたから読んでみようと思ったが、今一つ頭に入らぬ」

「あ、そう……」

「……咲良はきっと、もといた世界に可愛い恋人の一人もいるのであらうな」

突然のエドワードのそんな言葉に、は、と俺は間の抜けた声を上げてしまつた。

「な、何だよ急に。いないよ、そんなん」

だから失恋したばかりなんだって、言わなかつたつけ俺。それも告つて即フラれたから、恋人なんていたこともない。

即答した俺を、今度はエドワードが意外そうな目で見る。

「そうなのか？ 咲良、可愛いのに」

ちょっと待て、何かおかしくないか？

「……男に可愛いっての褒め言葉じゃないって、知ってる？」

「ああ。あ、いや済まん。悪気はない」

申し訳なさそうに頬を搔くエドワードを見て、俺はため息をついた。まあ悪気ないってことは、それがエドワードの率直な感想なんだろう。ちなみに、俺が好きだった先輩の率直な感想もそんなどこだろう。可愛いってことはイコール、男としては見ていなくてこどだらうから。

女の子が男に求める」とつて普通、かつによじとか遅しがだらうし。

「……エドワードは？」

「ん？」

「恋人いるの？」

あまり俺にとつて嬉しくない会話をばぐらかそつと、とつさに話題を変えたけど。すぐに返つてくると思つていた返事はなかなか無かつた。またエドワードが困つたような表情をして、胸に何かおかしな疼きが走る。

「えーと。俺、この世界に来た日に振られたんだよね」

その瞬間、何故か俺ははぐらかしたかつた話題に戻していった。いや、戻したかつたわけじゃないんだけど。それ以上に、さつきの話を続けたくなかった。エドワードは自分のことを聞かれるといつも辛そうだったし、それに、その答えを聞いて俺はビリしたいんだつて話だ。

……知らないといいし、知りたくない。どうしてか、そう思つてしまつ。

「……どんな人？」

ふと、エドワードが小さく呟く。よく聞き取れなくて首を傾げていると、すぐに彼女ははつきりした声で聞き直してきた。

「君の想い人は、どんな人だったんだ？」

問われて、ちょっと前まで日々に思いを馳せる。

学校での日常生活が、もつ隨分昔のことのように感じた。「どんな人って言われても……、うーん、年上で、気が強くて、なんていうか……」

学校とか部活って言つてもエドワードはわからないだらうから、説明しづらい。

先輩は、中学校のときの部活の先輩だった。

剣道部の、女子の主将で、大会で何度も優勝してて、まあ俺より余裕で強かった。パワフルで、明るくて、でも優しくて美人ではつきり言ってモテた。所謂高嶺の花というやつで、手が届くなんて思ったことはないんだけど。

でも先輩は俺を可愛がってくれて……文字通り可愛い可愛いと言がつてくれた。髪を伸ばした方が可愛いとか、セーラー服の方が似合うとか……、要するに遊ばれていた。俺はそんな先輩を追いかけて同じ高校に行つたものの、剣道は苦手でやめてしまった。苦手意識の理由は、いつまでも先輩に勝てないから。勝てない限り男扱いなんかして貰えなしだけど、勝てる自信なんか全くなくて放り出してしまったんだ。そんなヘタレな俺だから、想いが届くわけがない。

ああ、なんかこつして思い返せば返すほど……

「……エドワードに似てるよ、少し」

ぽつりと、そんな言葉を零してしまつ。

エドワードは少し驚いたような顔をした後に、複雑そうに目を逸らした。それから、また俺へと視線を戻す。

「……それなら、まだ振られたと思うのは早計かもな

「え？」

「どうあえず振つておいて様子をみようといつ腹がもしれんぞ」

「……エドワード、そんなことすんの？」

「さあ、私は女を棄てた身ゆえ、色恋沙汰など無縁だからな。だが、似てるところから私ならどうするか考えてみた」

面白そうに笑う彼女を見て、改めて女って怖え、などと思つ。こつちは必死だつていうのに。

でもそれより、色恋沙汰は無縁つて聞いてなんかほつとした。いや、なんでほつとしてるんだ俺？ 答えの出ない自問をして唸つている間に、エドワードが椅子から腰を上げる。

「咲良が想いを遂げる為にも、早く元の世界に戻れるといいな」 穏やかに微笑みながら、エドワードがすぐ傍まできて俺の頭を撫でる。……こういうことをされると、どう考へても身長が負けているという事実を突きつけられて、セツナイ。

「いいよ、もつ……。どつちかつて言えば、好きつてより憧れだつたし。周りが悪乗りして無理やり告らせただけで、それがなかつたら言うつもりなかつたし。所詮そんくらうことだから」

「……そりか」

エドワードは励まそうとしてくれてるんだろうけど、なんか喜べない。自分で理由のわからない苛立ちと共に吐き出すると、エドワードは髪を撫でる手を止めた。

「ならば、そんな見る田のない女のことなど、さつことされり

「…………！」

ふわりと体を包んだ温かさに、俺は呼吸を忘れて息を飲んだ。

「君は強くて優しい。それを解つてくれる、もつと相応しい人がいすれ現れるさ。……だから、いつか元の世界に戻つても変わらずにいてくれ」

優しく俺を抱く彼女の腕の中で、聞こえてきた言葉は少し苦つものだった。

俺の一体どこが強いというのか。俺よりずっと強い彼女に言われると、皮肉にしか聞こえない。だけど、その声も、この腕も、温か

くて優しいから、何も言えない。熱くなる頭で必死に平静を保ちながら、照れを隠すように俺は言葉を探した。

「……えっと。ハドワードって、なんかお母さんみたいだよね」
間違つても俺の母はこんなに優しくはないが、過保護などいふとか、いつも力づけてくれるところとかが、なんかザ・おかあさんという感じがする。そう思つて呟くと、何故かびしりと空気が凍つた。

そんな状況に抱く既視感。

これは、姉ちゃんの気に入りの服を汚しちまつたときとか、部室にあつた先輩の菓子をそれと知らず食つてしまつたときとか、ハドワードの前で老け顔つて言つてしまつたときとかの……あの空氣。

「……あ、いやその

取り繕おうとするものの、何が彼女を怒らせたのかがわからない。

……どうしてひしひしする時すでに遅じてこうやつだ。

結局それから数日間、ハドワードは口を聞いてくれなかつた。

その4（後書き）

読んで下さりありがとうございました。今のところ日常編は「」ですが、そのうち気まぐれに追加するかもしれません。以降は別
のシリーズになります。

「……何の真似だ？」

刺々しい声を頭上に聞きながら、俺は床に頭をこすりつけんばかりに土下座をしていた。

「だから、お前を見込んで頼みがあるんだ、ライオネル」顔を上げると、険しい表情が俺を見下ろしていた。けどその険しさには、戸惑いも少し混じっている。

まあ戸惑うのも無理はないだろう。俺も異世界で土下座が通用するとは思っていない。それでも、いけすかない相手に思わず土下座でお願いしちゃうくらい、俺は切羽詰まっていたのであつた。

何故、と問われれば、それは

「ライ！　咲良を見なかつた」

戸惑うライオネルに事情を説明しようとした矢先、突然部屋の扉が開く。ノックもせずに飛び込んできたのは、まさに今俺を切羽詰まらせている当人だった。そちらを向いた俺と目があうや否や、彼女は言葉半ばで口を閉ざす。そして、多分俺を探していたんだろうにも関わらず、唐突に回れ右をして退室していった。

扉の閉まる音に隠れてため息を吐きだした俺を見て、ライオネルがさつきより幾分納得いったように俺を見る。

「頼みとは、姉さんの機嫌を直せとかそういうことか？」

見透かされた問いに、俺は首を縦にふりまくつた。

「もう何日も口をきいてくれないんだよ。いい加減きまづい」

「そんなもの自分で謝れよ。僕が姉さんをどひじひどきるわけないだろ」

「謝つて済むなら俺だってお前を頼らないよ。お前にじひじひできないもの、俺はもつどうしようもないじゃんか！」

そつなく踵を返そうとするライオネルの襟首をつかみ、俺は力任せにぐぐぐくと揺すった。

「や、やめろ！ 僕は機嫌の悪い姉さんに近づきたくない……」「

悲鳴のように叫ぶライオネルの声を聞き、俺は彼を揺する手を止めた。その顔色が青ざめているのは、多分激しく揺さぶられたからとこつわけではないだろう、彼の言は俺にも理解できることであり、俺だって逆の立場だつたら絶対関わりたくない。

「謝ったのに機嫌が直らないなら、誠意が足りないんだろう」

襟元を直しながら、ライオネルにも見放され、俺はいよいよ追い詰められた。

まだこれが俺がいた世界で、姉ちゃんとか先輩なら、ケーキでも買って頭を下げればなんとかならなくもないのだが……、物で釣るなどか言うながれ、俺なりの誠意だ。だが、この階にケー・キ屋さんとかはきっとないだらうなあ。そもそも、エドワードに何をあげれば喜ぶのかなんて見当もつかない。

「……なあ、ライオネル。エドワードって、何が好きかな

「もしかして物で釣る？とか考へてるのか？」

「う、いちいち痛い突っ込みをしてくる奴だ。気まずくて俺は目を逸らした。まあ、それを聞けたところで、俺にあげられるものなんてないんだけどさ……。諦めて、許してもらえるまで謝るしかないな。そう思いなあしてライオネルに目を戻すと、彼もまた違うところを見ていた。

「ライオネル？」

「……花」

どこか遠くを見るような彼の目がなんだか寂しげに見えて、名前を呼ぶ。すると彼は俺を見てそう呟いた後、今度は下に視線を落とした。

「え？」

「花が好きだったよ。……白い花。裏の森でも探せば咲いてるんじやないか」

「うちらを見ないまま呟いた彼は、俺の問いに答えてくれたんだといつことにやつと氣付く。

花、か。それなら、確かに探せばなんとかなりそうだ。とても良いことを教えて貰つて、俺は目を輝かせつつライオネルの両手を掴つてぶんぶん振つた。

「！？」

「サンキュー、ライオネル！」

驚いたように目を白黒させるライオネルに感謝の言葉を述べ、俺は彼の部屋を飛び出した。

その後俺はその足で森に入つて、花を探していた。だがすぐに見つかると思ったのはさすがに楽觀しすぎていたらしく、木と草ばかりで花らしきものは見当たらない。それもそのはずだらう 外は寒い。花なんか咲くような気候じやない気がする。

あまり部屋を空けたら、エドワードはきっとまた心配するだらう。ここ数日、口は聞いてくれないけど、それでもエドワードは俺の傍にいてくれるし、さつきだつて俺を探してくれていたんだと思う。彼女は少し過保護すぎると思うけど、でも心配はかけたくない。

急ぎ足で俺は草の間や木の根元にも目を凝らす。……それにしても。

「花、かあ……」

なんだか意外だつた。

姉ちゃんや先輩とかでさえ、花より団子な人達だつた。花なんて贈つたつて、「こんな食べられないもの貰つても」って言われるのが関の山だと思う。けどあのエドワードが花が好きだなんて。

いや、似合わないっていうわけじゃないけど。

彼女を知る度に、不思議に思う。俺を可愛がつてくれたり、恋愛小説に興味があつたり、花が好きだつたり。知れば知る程、彼女は英雄つて呼ばれるような人物には見えなくなつてくる。勿論、彼女が強いのは知つているんだけど

「……あ」

ふと木々の切れ目が見えて、俺はそんな声を漏らした。少し遠くに川のせせらぎが聞こえる。そこまで歩いていくと崖があつて、覗きこむと下は川だった。だけど俺の興味を引いたのは崖でも川でもなく。

その崖の途中に咲く、白い花だった。

「あつた！」

ようやく探しものを見つけて、盛大に独り言を叫ぶ。だが見つけたはいいものの、手を伸ばしても届きそうにない。けど、目も眩むような高さというわけじゃないし、下は川だ。見た感じ、流れもそう急じやない。足場もありそうだし、フレンシアの簪を抜け出したことを思えば、あれと大差ない難易度だ。

よし、と気合を入れ直して、慎重に崖を下る。そして、目的の花に手を伸ばしたその瞬間だった 蹄の音が聞こえてきたのは。もしかして、と思う間もなく、聞き慣れた声が俺の名前を呼ぶ。

「エドワード？」

咄嗟に答えると、蹄の音は止んで。それからすぐて、崖の上から顔を出したエドワードが、群青の瞳で俺を見下ろす。そして、「何をしているんだ！」

「『ジッ、『じめんなさい！』」

くわっと凄い形相で睨まれて怒鳴りつけられたので、俺は反射的に頭を抱えて謝った。途端、ぐらりと体が大きく傾ぐ。馬鹿、と叫ぶエドワードの声を遠くで聞きながら、俺は谷底の川に吸い込まれたのであった。

「咲良……！」

一瞬気が遠くなりかけたけど、激しい衝撃と水しぶき、そして名を呼ぶ声に目を開ける。

起き上がるうとしたらあちこちに鈍い痛みが走ったけど、それで

も腕も足もちやんと動いた。川はそれほど深い深さもなく流れも穏やかで、俺は川の中に座つたまま、あつと/or間に崖をおいてこちらに駆けよつてくるHドワードに手を向けた。

「咲良、怪我は！？」

濡れるのも構わぬ俺の傍に膝をついて、Hドワードが勢い込んで尋ねてくる。そんな彼女を見て、大丈夫、と答える前に何故か笑ってしまった。だけど怪訝そうな目を向けられて、慌ててそれを引つめる。心配してくれたのが嬉かつたなんて、恥ずかしくてとても言えない。

「じめん。大丈夫だよ」

「本当に？」

疑わしげな顔で聞いてくる彼女に、俺は自分の手に視線を落とした。自分の体より先に咄嗟に庇つていた白い花は、どうにか無事だつた。いやこれ一本だつたわけじゃなく、崖にはまだ他にも咲いているわけで、ちゃんと自分の体を守つていれば打ち身も減つたかもしないんだけど。でも無意識にそうしてしまつたんだ。

だけど、また心配かけてしまつて、こんなところまで探しに来させてしまつて、花一本だなんて、余計に墓穴を掘つた気がする。

心配そうな彼女にそれを差し出しながらも、情けないやら恥ずかしいやらでとても目は合わせられなかつた。

「ええと、その……ごめん。怒らせたり、心配かけたりばっかりで」田を逸らしているので、彼女がどんな顔をしているのかはわからぬ。だけどなかなか返つてこない返事に恐る恐る顔を上げると、彼女はぽかんとした顔で花を見つめていた。

「……Hドワード？」

呼ぶと、彼女はそこで初めて氣がついたかのよつて俺に問い合わせてきた。

「私、に？」

それに頷くのは、俺にとつてはあまりにも当然のことだったんだけど。Hドワードは驚いたように目を見開き、何度も双眸を瞬かせ

る。

「……出ていったのでは、ないのか」

「え？ あ……」

ふと彼女が漏らした言葉に、彼女が心配してたのは俺の安否だけではないことを知ることになった。

もしかしたら、いつも俺を一人にしないのも、少しの用でも、慌てて帰つてくるのも

「私に愛想を尽かして出て行つたのか、それとも元いたところに戻つてしまつたのかと思つた」

「な、なんで」

とても彼女を直視できなくなつて、その長い髪が川の流れに攪われて揺れていのをぼんやり眺めながら、だけど聞こえてきた言葉はおかしいもので。

愛想を尽かされたのは俺の方だと思つていたのに。

「俺、怒らせてばかりなのに」

「まく言葉にならなくて、だけどそつ呻くと、ふと花を持つ手に体温を感じた。

「……私は、怒つたり笑つたり、そんなことずっと忘れていたんだ。黒太子と呼ばれるようになつてから、ずっと」

そつと俺の手から花を取り、そして、Hドワードは顔を上げて笑つた。

その笑顔があんまり眩しくて、あんまり白い花が似合つから。思わず目を細めてしまった。

彼女はいつも黒い軍服を着ていて、凜々しい風貌にそれがとてもよく似合つているんだけれど。こんな風に笑つているのを見ると、黒い軍服より白いドレスの方が似合つんじゃないかって、思う。

黒太子と呼ばれる、戦場で剣を振るう彼女を、俺は見たことがない。

だから、俺は彼女が英雄に見えないなんて思つんだけど。だけど、普通に笑つて怒つて、普通の女の子のように見える彼女の一面は、

もしかしたら俺しか見てない一面なのかも知れない。

「……もう、黙つていなくならないでくれ。怒つたりしないから」「そんなことを思った瞬間、聞こえてきた声に顔が熱くなった。

大事そうに花を抱きながら、呟いた声は力無くて、笑った顔はなんだか儂くて。……守つてあげたいと、思つてしまつくらい。そんな自分の思いに戸惑いながらも、俺はほぼ反射的に叫んでた。

「い、いこよ。俺、無神経だし、嫌なときは怒つてくれないとわかんないから!……だけど、俺他に行くところないから、その……」けど、何か恥かしくて、言葉は尻すぼみになる。言いたかった言葉は、結局川の音に消されそつなくらい小さくなつた。

「……帰つてもいい?」

だけどちゃんとそれは届いたようで、泣き笑いのような顔をしたエドワードが、立ちあがつて俺に手を差し伸べてくる。

……本当は、それは俺がやらなくちゃいけなかつたことであり。守りたいなんて、彼女に言わせれば百年早いのかも知れないと苦笑しつつ、俺はその手を取つて、だけどなるべく頼らなによつて立ち上がつた。

ちなみにその帰り道、エドワードが跨る馬の後ろで振り落とされないよう必死で彼女にしがみつく羽目になつた俺は、やつぱり百年以上早かつたと痛感していたのであつた。

エドワードの部屋は、基本的に人が訪れることがあまりない。来たとしても弟さんくらいで、軍に関することだとか、戦況だとかも伝えたり相談にくる程度だ。……たまに、俺を襲ってくることもあるけれど。

それ以外に他の兵士が来ることは今のところなかったので、ノックの後に彼ではない声で彼ではない名を名乗り上げるのを聞いて、けど驚いたのは俺だけではなかつたようだ。いや、ライオネルはノックなんかしないから、その時点で違うことはわかるのだけど。それを聞いたエドワードも、少し怪訝な顔をしていた。

「何だ」

「ライオネル様が、その」

来訪した兵士の口からライオネルの名前が出て、またエドワードの表情が変わつた。口を開きかけて、だけど俺にちらりと視線を投げてからそれをやめると、エドワードは席を立つて扉の方へと歩いて行つた。多分、入れといいかけて、俺に配慮してやめたんだろう。やや気まずくて小さくなりながら、部屋の扉を開けるエドワードの背を見守る。……弟さんに何かあつたんだろうか。エドワードもきっと同様のことを思つたんだろう、少し心配そうだった。俺は弟さんと仲がいいわけじゃないっていうかむしろすごい悪いから、彼が心配というよりは、そんなエドワードのことが心配になつた。ライオネルには悪いけど。

「ライがどうかしたのか」

扉を開けて問うエドワードに向ひついで、兵士が敬礼の後で答えたのは。

「お倒れになりました」

などと黙つから、たゞがにエドワードじゃなく俺までも焦つたの

だが。

「ただの風邪つて。ほんとに貧弱だな、お前」「う、煩い……！」

俺の揶揄に、反論する声は弱々しい。

本当のところ、俺もこないだ熱出したばかりだから人のことは言えないのだが。この弟さんにはいつも手を焼かされているから、こそとばかりに仕返ししておく。さすがに酷い病気だつたらやめておくけど、言い返していく元気はあるようだからこれくらいだらう。エドワードも心配そうな顔はそのままだが、さつきよりはどこかほつとしたような感がある。

「疲れが出たんだろうつ。後のことば私がやるから、ゆっくり休め」「だが……」「だが……」

「元々私がするべきことだ。気に病むことはなーれ」
せいぜいと息を切らせる弟さんから彼女の方に目を向けると、彼と話をしていたエドワードも丁度同じようなタイミングでこちらを向いた。

「済まない、咲良。ライが動けない以上、私が軍を統率せねばならん。今までのように君の傍にいてやれない」

「え？ ああ……大丈夫だよ、俺は」

そんな風に言われると情けない。だが実際、敵だらけのこの階で一人になるのは少し怖いと思つてゐるので、そんな風に言われなくとも情けないには変わりないけれど。でもなげなしのプライドでそんな不安を隠して答えると、エドワードは少し微笑んで俺の髪を撫でた。

「なるべく早く戻る」

しかしいくらなんでも、これじや初めてお留守番する子供じやないか。恥ずかしさに何も言えないでいると、突き刺さるような視線を感じた。

「姉さんに……触るな……！」

うん、熱で視覚までやられてるんだろうが。どう見ても触られて

いるのであって、俺は一切触っていないんだが。それとも、俺の髪が彼女の手を触っていると不満でも言いたいのだろうか。その捉え方は一般的ではないと思うが。

納得行かない目で叫ぶライオネルを見ていると、名残惜しそうに頭から手が離れ、では、とエドワードは声を上げた。

「行つてくる。私がいない間ライを診てやつてくれ、咲良」
しかしどんでもない要求が来て、俺とライオネルの悲鳴が重なつた。

『はあ！？』

綺麗に声がハモった後に、互いに険しい顔を見合せた後、同時にエドワードへと向き直る。

「ま、待つてくれ姉さん。なんで僕がこいつに」

俺が言葉にならない不満に口をぱくぱくさせていく間にライオネルがそう叫び、それに便乗してぶんぶんと首を縦に振る。だがエドワードはきょとんとしてこちらを見ただけだった。

「なんだ、私じゃないと駄目か？ 寂しいのか？」ライ

「いっ、いやっ、そうじやない！？」

「そうか。てつきりお前も添い寝して欲しいのかと思つたぞ」

「そんな訳」

不服そうな割に顔が真つ赤なのは、熱のせいでなければこいつのシステム度は相当危険レベルだ。だがそんなことを冷静に考えている場合ではないことに、エドワードの言葉の一部分だけを反芻したライオネルの声で思い知る。

「『も』？」

「わあああ！ わかつた！ 後は任せろ！ 行つてらっしゃい！！」

ライオネルにいらない詮索をされる前に、俺は咄嗟に叫んでいた。あんなことバレたら、今度こそライオネルに殺される。エドワードはそんな俺の声に押されるように踵を返したが、その瞬間、本当に一瞬だけど 彼女がくすっと笑つたのを俺は見逃さなかつた。」
「わざとだな。

ばたんと部屋の扉が閉まり、俺は修羅場の空気なまま、ライオネルと一人残される。

「……貴様、まさか姉さんにいかがわしいことを」

「し・て・な・い！ んなこと考えるお前がいかがわしいわ……」

「ふざけたことを、毎日姉さんの部屋に入り浸つておいて」

「だが激しい咳が、彼の言葉を遮る。

「言わんこっちゃない。大人しく寝とけよ」

「貴様の世話にはならん！」

「俺だつてやだよ。でもエドワードに頼まれたし……」

それに、成り行きとはいえ「任せろ」と答えてしまった以上、放り出してエドワードの部屋に戻っているわけにもいかないだらう。それじゃ嘘をついたことになってしまつし、氣まずい。とはいへ、子供でもあるまいし、似たような歳の男の看病なんて積極的にする気になれない。とにかく腰をおろそうと椅子を探して周囲を見回すと、手をつけてない食事が皿に入った。

「お前、飯食つてないの？」

「こらん」

「食わなきや治らないや。あ、薬もあるじゃないか」

「受け付けん

「子供みたいなこと言つなよ。それとも愛しの姉さんに食わせて貰わなきや無理か？」

「貴様、ふざけたことを…」

だから何故そこで赤くなるんだ、危ない奴だな。だが俺の挑発は功を奏したようで、ライオネルは起き上ると食事に一警をくれた。
……「んな面倒な奴の看病なんて、エドワードの頼みじやなきやさすがに氣のいい俺でもお断りだ。

開始三分程度で疲れてしまつて、俺は長いため息を吐いた。

「エドワード、いつ戻つてくるんだろ」

「……訓練と軍議、それから雑務も色々ある。最近は僕だけで追いかないこともあつたからな……戻つてこれればいいが」

俺の独り言に、ライオネルは意外にも答を返し、それから食事に手を伸ばした。そして、かなりのスローペースではあるが、少しづつ口に運び始める。

「倒れている場合じゃない。姉さんに負担をかけては、僕がいる意味がない」

まるで自分に言い聞かせるように、ライオネルがぽつりと呟く。それからだいぶ時間はかかったが、驚いたことに彼は食事を全て食べると、大人しく薬も飲んだ。よほど姉が心配なんだろう。

「訓練とか……、軍のことをエドワードがやるのって、なんか想像できないな……」

「この分では俺がすることはとくになさそうだ。

言つてるそばから訓練でも始まつたのか、外から声が聞こえてくる。それを聞いているだけの俺にとつては、ただの気だるい昼下がりだけれども、この指揮を執っているのはエドワードなのだろうかと思うと、どうしてか落ち着かなかつた。

「……この軍の指揮官はエドワードだ。前は姉さんが全てやつていた」

「うん、知つてゐるし、エドワードが強いのだつて見てればわかるよ。それでも……何か、似合わないというか……」

不思議そうなライオネルに、そんな風に返す。

似合わないつていうのもおかしな話で、彼女がヴァルグランの英雄つて聞いたときは、何の違和感もなかつた。女の子つていうことを知らなかつたからかもしれないけれど、凛とした表情も風貌も、そう呼ばれるに相応しいと思っていたのに。

なんでそう思うのか自分でも分からなかつから、ライオネルが怪訝な顔をするのも無理はないと思つ。

「信じられないなら、見てくればいい」

「いや、いい。……なんか、見たくない。やつぱり、似合わないと思う」

花を持つて微笑んでいたエドワードが頭に過ぎつた。あの笑顔な

ら、見ていたいと思うんだけど。

「……なら、黙れ。僕は寝る。早く復帰しなければ」
言うなり、ライオネルが毛布を被つて目を閉じる。

「だが、そうしたら姉さんがお前のところに帰るっていうのが、釈然とせんが」

刺々しい声を残して寝息が聞こえ、俺は苦笑した。

ほんと、とんでもないシスコンだと思っていたけど。今は、なん

となくライオネルのその気持ちがわかる気がした。

扉の向こうで物音がして、まじろみから引き上げられる。物音といつても些細なもので、いつもの俺なら絶対にその程度では起きない筈だ。なのにどうしようもなく覚醒してしまった理由に気付いて恥ずかしくなりながらも、扉が開くのを見てほっとした。ほつとしている自分に気付けば、また恥ずかしくなるのだけれども。夜明けはまだのようで、黒髪と黒軍服は扉の向こうの暗闇に溶け込んでいる。だけど、部屋の窓から差し込む月明かりが、群青の瞳を照らしていた。

「……おかいり」

何を言つていいか分からず、咄嗟にそんな言葉が出てくる。

ライオネルが倒れてから一日、エドワードは俺の前に姿を見せなかつた。二日目に入つて復活したライオネルが軍務に戻つたので俺も部屋に戻つたけれど、それからも彼女はなかなか戻つてこなかつたのだ。

「ただいま、咲良」

嬉しそうにそう言つて笑うと、エドワードは隅っこでうずくまる俺のところにまっすぐ近づき、俺の前でしゃがんだ。

「待つててくれたのか？」

「……いや、寝てたよ、ちょっと」

「ああ、起こしてしまったのか……、済まない。どうせいなかつたのだから、寝室を使えば良いのに」

いなからといって、女の子のベッドを勝手に使えるほど俺は図太くない。けどそんなことを語つても仕方ないので、それよりと俺は話を変えた。

「忙しかつたんだろ？　エドワードこそ、早く休んだ方が」

「ああ……、だがもう少ししたらまた出る。ライが無理していない様子を見たいし

確かにあいつはやせ我慢していそうだ。無理に食事をかきこんで、薬を飲んでいた様子を見るに、とにかく動ければ飛び出していきかねない気配を感じた。だから、申し訳なさそうなエドワードに向かつて声を上げる。

「……だったら余計少しでも休んだ方がいいだろ。俺なんかより自分や弟のこと心配しろよ」

乱暴な言い方になってしまったのは、恥ずかしかったからなんだけど。気を悪くしなかつたかと心配になるが、目が合つた彼女はそれどころかくすぐすと笑つていた。

「……何？」

「いや、なんでも……、あ」

笑われてむつとしている、エドワードは笑うのをやめた。でも俺がむつとしたからやめたのではなく、何かが気になつたという感じで、エドワードは立ちあがると窓辺へと歩いていった。そりゃ見て、彼女が何を気にしたのかが俺にもわかる。

「少し、しおれてしまつたな」

窓辺の一輪ざしには、この前俺が贈つたあの白い花が挿されている。花が好きらしいエドワードは、それをとても大切にしてくれていたのだけれど、いくら世話をしたつて切り花だからそう長くは持たない。そんなことは当然エドワードにだって分かっているんだろうけど。

「……そりや、いつかは枯れるよ」

「ああ、わかつている」

窓辺で月明かりを受けるエドワードはとても悲しそうで、何故か心臓をぎゅっとつかまれるような息苦しさを感じた。そんな思いに突き動かされるように、反射的に立ちあがつた俺を、悲しそうな顔のままエドワードが見る。

「枯れたら、また取つてくるよ」

「外は危険だと言つているだろ?。……いいんだ。それに、これがいいんだ」

子供のようなことを言つて、エドワードが曖昧に笑う。どういう意味なのかはかりかねて、何て言つていいのか分からなくなつたけれど。代わりに、ふと思いついたことがあった。

「なら、押し花にする?」

「押し花?」

俺の提案をエドワードが反芻する。その様子じゃ知らなそんだな。「花を保存する方法だよ」

「そんなものがあるのか?」

心底驚いたように目を丸くするエドワードに頷いてみせると、彼女は興味津津といった感じでまた俺の傍まで戻つてきた。

「教えてくれ

「う、うん。じゃあえっと、とりあえず……何かいらない紙、ある?」

俺の問いに、エドワードはぐるっと部屋を見渡すと、やがてふと一点に目を留め、椅子の上に放り出してあつた本を持つて戻つた。

「つて、それって本じゃん。汚れるから、読めなくなるよ

「いい。もう読まん」

「でも……」

本は大事にと幼稚園で習つた俺には抵抗がある。しづつてみせると、エドワードはちょっとと考えるように本を見てからそれを置き、今度は机の方に向かつて、上に置いてある書類から数枚抜いて戻つてきた。

「それ、重要書類とかじゃないの?」

「本国からのライオネルの召還命令だ」

「……いいの、それ

「本人が受け取らないものを私が持つても仕様がなかろう」「苦笑しながらそう言われて、俺も苦笑しながらそれを受け取つた。

確かにあの超絶シスコンヤローは、拘束して引きずつてでも行かない限り、姉から離れることはなさそうだ。

受け取った紙を持つて一輪ざしがおいてある窓辺に行き、花を取り出して長すぎる茎を折る。そして紙の上で綺麗に花弁と葉を広げると、紙を折つてそれを挟む。それから、そんな俺の一連の作業をじつと眺めていたエドワードは、「俺は重しになるようなものがないか尋ねた。少し考えたエドワードが持つてきたのは結局さつきの本で、今度は俺も黙つてそれを受け取つて花の上に乗せる。

「いつすれば花の水分が抜けて腐らないよ。まあ、適當だから綺麗にできるかはわからないけど。普通は栞とかにするんだ」

「適當という割には、随分手慣れていたな」

それは姉ちゃんが前に夏休みの宿題でやつてたのを散々手伝わされたからである。

まあそんなことはどうでもいいので曖昧に笑つていると、エドワードはわくわくした子供のような目で重し代わりの本をいや正確にはその下の花をだらうが、見つめた。

「……本、面白くなかったの？」

なんとなく聞いてみると、エドワードはこちらを見ないまま、答もなかなかれなかつた。その横顔は少し困つているように見えて、質問を撤回しようか悩み始めた頃によつやくエドワードが口を開く。

「恋、とはどういうものなのか、私には解らん」

だが内容は唐突なものだつた。聞く限り答には聞こえなかつたそれが意味を考え、ふとその本を恋愛小説と言つていたことを思い出す。

「どうこうものって……、今まで誰か好きになつたことないのか？」

率直に問うと、エドワードは少し考えるような素振りを見せてから、やはり首を横に振つた。

「……わからん。私は戦ばかりしているから、人の感情に麻痺しているのだろう」

「なんだよ、それ」

エドワードが馬鹿なことを言つてだすので、俺はつい声を荒げた。

だけど、彼女がそんな自虐的なことを言つるのは珍しい。ところより、

今まで自分のことなんて全然言わなかつたから。自分のことを話してくれるのは嫌ではないけど、でも自分のことをそんな風に囁つのは、よくないと思つ。

そんな俺の感情を読みとつたよつて、エドワードは薄く笑つた。
「好意を持っているつもりの相手からそう言われてな。だが何も言い返せなかつた。だが話に聞いたり本で読んだりするような恋焦がれるという感情は、そんな淡泊なものではない気がするんだ」

そんな彼女の言葉に、苛立ちはますます募つた。……なんだそれ。そんなの、相手の方がおかしいじゃないか。

「どう考へても相手が馬鹿だろ。それこそ忘れりよ、そんな奴のこと」

前に勵まして貰つた言葉と同じようなことを、今度は俺がエドワードに向けていた。どんなつもりだろうと、そんな相手を傷つけるような言葉ほいほい言つやつろくでもないような感じしかしない。

俺だつて、エドワードをよく知つてゐわけじゃない。それでも、これだけは言える。

「感情が麻痺してゐるような人が、笑つたり、花を大事にしたりなんかしない」

エドワードは一度ふつと笑みを消したが、またすぐに笑顔に戻つた。

「咲良……、ありがとう」

さつきよりもずっと柔らかい笑顔で礼を言われ、照れて顔を背けようとしたのだが、頬に掛かつた手がそれを阻む。誰の手かなんて考へるまでもなく、俺の前にはエドワードしかいないわけで。

「……え？」

「ならば、君が忘れさせてくれ

」「惑つ俺を覗きこんで、間近でエドワードがそんなことを囁いて。

「…………」

動搖した俺は、咄嗟に離れようとけぞつてバランスを崩し、そのまま後ろに倒れて壁で後頭部を強かに打つた拳銃、立てかけてあ

つた剣を派手に薙ぎ倒しながらその中に突っ込むことになった。

「咲良！？」

そんな大惨事を見てエドワードが俺の名を叫び、頭を抱える俺の傍に膝をつく。

「済まない、冗談だ。そんなに派手に転ぶとは思わなくて」

だがその言葉は最初こそ済まなそうだったが、後半どんどん震えていく。そしてとうとう、堪え切れなくなつたのだろう。最後におもいきり彼女は吹き出した。

「ふつ、あはははは！」

エドワードは俺をからかってくすくす笑つたり、穏やかに笑つたりすることによくあるけれど、こんな風に思い切り声を出して笑うところは初めてみた。最初はぽかんとして、でも俺が笑われていることに気付いてちょっとむつとして、だけどそんなものはすぐに消えて。

笑うなよ、つて文句を言いながら、最終的に俺も声を上げて笑つていた。

俺は女顔な上単純馬鹿で、エドワードにからかわれてばかりだけど。それで彼女が楽しんでくれるのなら 笑つてくれるのなら。

女顔で単純馬鹿で良かったなんて思つあたり、俺は本当に単純馬鹿である。

今日も、とくに変わり映えのない一日が終わる。毎日の習慣である就寝前の素振りをしていたら、珍しくエドワードが話しかけてきた。いや、話かけてくること 자체は珍しくないが、素振りの最中で、ということはあまりない。

「見れば見るほど、咲良の剣は珍しいな。構えも型も私が知っているどれとも全く違うし」

俺の刀に視線を当てながらそう言うエドワードに、俺も改めて自分の刀を見た。なぜ異世界に日本刀があるのかということのは、俺もかねてから不思議だった。けれど異世界といつても、建造物も植物も、それによく間も、俺がいた世界とさほど変わりないところを見ると、エドワードが知らないだけで、この世界にも日本のような国があるのかもしない。

「実は前から気になっていたんだ。咲良の知っている剣術を私に教えてくれないか？」

俺のすぐ隣まで来て、なぜか恥ずかしそうにエドワードがそんなことを言つ。エドワードに頼みごとをされるなんて滅多にないので、俺は二つ返事で応じた。ついでに、女の子がもじもじしながら頼みごとをしてきたなんて経験も俺にはないので余計テンションが上がつた。内容的には、もじもじされるようなことじゃないとしてもだ。やっぱり軍人として、見たことない剣術などは気になつたりするんだろうな。俺も武道家の端くれとして気になる気持ちはわかるので、エドワードに刀を渡すと、彼女は嬉々としてそれを構えた。

「いいか？」

持ち方も構えもいきなり様になつてるので驚いた。見るだけで同じことができてしまつのような天才タイプだな。

「うん。あとはもう少しこんな感じで」

ほとんど申し分なかつたが、ここまで優秀だと完璧を求めたくな

る。それでつい、俺は後輩に教える気分でエドワードの手に触れてしまった。だが、ふと彼女の視線を感じて我に返れば、その距離の近さに硬直してしまう。

唐突に部屋の扉が開いたのは、丁度そんな瞬間だった。

「エド」

エドワードを呼びかけた声が、途中で消える。間髪入れずに爆発するじす黒い殺気に俺は咄嗟に手を離したが、もう遅いのはわかっている。

振り向くと、ライオネルが凄まじい形相でこちらを睨んでいた。

……こいつは、なんでこうタイミングが悪いのか。

「くッ、ついに正体を現したなこのま男が！ 姉さんから離れろおおツうごふツ！？」

全くの誤解、とんでもない勘違いで、ライオネルが懐から出した短剣を振りかぶり、俺めがけて突っ込んでくる。だが俺がそれをどうこうする前に、エドワードが俺の刀でライオネルの足を払つていた。

足元を掬われて勢い良く転がつていくライオネルを見ていると、自業自得とはいえないんだか少し哀れだった。

「ノックをしろ、姉と呼ぶな。何度言えばわかるんだ」

ため息と共に吐き出しながら、エドワードが俺に刀を返してくれる。それを受け取った頃には、よろめきながらもライオネルは立ち上がつっていた。

「用件は？」

まだ何か言いたげに俺を睨むライオネルを、エドワードがそんな言葉で黙らせる。彼は不満気に顔を歪めたが、しぶしぶと問い合わせに答えた。

「……ノザ彗の守備に当たつていた小隊からの連絡が途絶えた。交戦の報せはないからフレンシアの線は薄いが、どうする？」

ふつとエドワードが真顔に戻る。元々ふざけていた訳ではないが、彼女を包む空氣のようなものがふつと変わった。

「北か。確かに妙だな。フレンシアならまづヴァザを突破しないとあそこを攻めるのは難しいだろう」

「ああ、だから対応に迷っている。様子を見にいかせようかと思うが、『帰らずの地』からの連絡が途絶えたとあれば、皆行きたがらないだろ?」

「そんな迷信を」

ふつとエドワードが鼻で笑い、そう口にして、途中で止めた。そんなエドワードをライオネルが不思議そうに見て、会話が止まる。

「……帰らずの地って?」

沈黙が続いたのでなんとなく聞いてみると、ライオネルがまた険しい顔で俺を睨んだ。

「北には冥界だか異界だかへ続く道があると言われる。ノザは大陸最北の地だから、よく人が消えるだの、帰らずの地だの言われるんだ。いつお前がノザで消えてしまえばいいのにな」

丁寧に答えてくれたのは、最後のが言いたかつただけか。半眼で半笑いしつつ、だが俺は唐突にはつとした。

異界だつて?

「ただの迷信だ。視察隊を編成しろ。誰も行かねば私が行く」

「……それくらいなら僕が行くが、それを聞けばどいつも喜んで志願するだろ? わかった、早速向かわせる」

答えて、ライオネルは退室していった。俺を睨みながら。けど俺にはもうそれに構つている暇はなかった。

「エドワード、俺、そこ行つてみたい」

「……言つと思つた」

「え?」

ぼそりとエドワードが呟く。よく聞こえなかつたので聞き返すと、エドワードは何も答えずに俺を見た。その深い青の瞳が少し悲しげに見えて、どきりとする。

「いや。……そうだな。異界を迷信と言えば、君の存在を否定することになるか」「

俺の頭に優しく手をおいて、Hドワードがそんなことを言つ。俺も、「冥界だの異界だの、そんなよくわかんないものは信じていなかつたから、Hドワードが迷信だと言つ気持ちは解る。けど実際違う世界に来てしまって、頭の中で変な声がする今となつては、不本意でも迷信と切り捨てるのは難しい」というものだ。

異界に近いと言われる北の地。その異界が俺の世界かどうかはわからぬけれど、ここにじっとしてこるよりは、帰り道に近づける気がした。

でも何故だらつ。嬉しい情報を得た筈なのに、ちつとも胸がはずまない。

それどころか、頭の上のHドワードの手を、子供扱いするなと振り払う気力すらない。

どこか悲しげなエドワードの目を直視する「ともできなかつたけど、外した視線の先のHドワードの顔色が悪い気がして、俺は喉の奥に引っ込んだ声を引き摺り出した。

「……Hドワード？ 風色悪いよ。疲れてるんじゃない？」

「いや……、ああ、そうだな。そうかもしねない」

一度は否定したものの、Hドワードは俺の頭に置いていた手を自分の顔に当て、力無い声を出した。つい先日まで、倒れたライオネルの代わりにHドワードが奔走していたのだ。疲れていておかしくないとと思う。

「忙しいのに我儘言つてごめん。休んだ方がいいよ」

ただでさえ、Hドワードは俺に気を回しつぱなしだ。それなのに自分のことばかり考えていたのが恥ずかしくなつた。

いつもなら、そんなことはないつて突つぱねるのに、そつする、と答えていやに素直に寝室に向かうHドワードは、やっぱり元気がないよう見える。のろのろと奥の部屋へ引つ込んでいくHドワードを見ていると心配になつてきて、思わず俺はその後を追つた。

「熱とかない？ 俺もライオネルも倒れたばかりだし、感染つたかも……」

「そうかもな。なんだか寒気がしてきた」

「ええ？ 大丈夫？」

「一緒に寝てくれれば温かいんだがな」

予想外の返しに、俺はひきつった声を上げてしまった。それを聞いたエドワードが、くすと笑い声を漏らす。

「か、からかうなよ？ 僕本気で心配してんだから」

「からかっていいわ」

嘘だ、と言おうとしたが、見上げたエドワードの顔は全然笑っていないなかつた。ランプの灯りが頼りないせいか、彼女の表情まで弱々しく見える。俺が何か言つ前に、彼女はついと顔を背けて、ベッドに入ると毛布を被つた。

取り残された俺はどうしていいか分からずにただ立ちすくむ。

もし、その帰らずの地に、俺の世界へと続く道があつたなら。

当然だけど、俺はここからいなくなる。

突然、一人の夜が寂しいって言つてたエドワードの声が蘇つた。

……俺は、戦争なんてできないし、そんなことに関わりたくないし、元の世界に帰りたいって思つてる。けどそうしたら、エドワードには会えなくなる。まだ、助けてもらつた恩返しも、何一つできていないので。

俺にできることなんて、未だに何も思いつかないけど。もし、一人が寂しいっていうエドワードの言葉が本当なら。俺をからかっていいつていうのが本当なら。ここにいるだけで、俺は少しでもエドワードに何か返せているのだろうか。

ためらいながらもそつとベッドに近づくと、毛布が小刻みに震えて見えた。

「……寒いの？」

返事はなかつたけど、俺は覚悟を決めてベッドに上つた。

もちろん、断じて、やましいことなんか考えていない。

彼女に背を向けて、落ちそうなほど端っこにしがみつく。いや、

これじゃ寒さ対策にはならないから意味はない。かといって、これ

以上は限界だ。と、俺が葛藤を続けていると、急にふわりと毛布がかかり、背中に温かな体温を感じた。

「……ツ」

「温かい」

危うく転がり落ちそうになるのを、すんどのところで堪える。けど次の瞬間にはどうして堪えたのかと後悔した。素直に落ちておけば良かった。こんなところをライオネルに見られたら、確實に命がない。

「……前はよくこうして、ライと一緒に寝たな」

今しがた浮かべた名前を、Hドワードが口にする。つていやまで、それ一体幾つまでやつてたんだあいつ？

「咲良も、こんな風に家族と寝ていたか？」

「いやまあ……そりゃ物凄く小さな頃はそうだつたろうけど……」

「……そうか。なら、家族のところに帰らなければな

ぎゅ、と服を掴まれたのがわかつた。とにかく、女の子どもひとつベッドで寝てこむという非常事態を忘れ去る為にも、俺は思考することに没頭する。そうすると、なんとなく分かつたことがあった。「Hドワードは、家族が好きなんだな」

「ああ。母上と兄上はいなくなってしまったけれど……いつも私達のことを一番に考えていてくれた。父上は厳しいけれど本当は優しい人で……、妹はしつかり者だけど甘えん坊で、弟は私がいないと駄目な癖に意地つ張りだ」

Hドワードの家族について俺はライオネル以外知らないけれど、少なくとも弟はその通りだな。でも、彼女が自分のことを話してくれたのは初めてだった。それがなんだか少し……嬉しい。

「咲良の家族は？」

「え？ 俺は……普通だよ。父さんは仕事で今は一緒に住んでないけど、母さんと姉ちゃんと……。うーん、別に家族について改めて考えたことないから、うまく言えないけど……、今にして思えば幸せだったんだなって思うよ」

向こうの世界で俺がいなくなつたりしたら、母さんは心配するだらうな。姉ちゃんは心配かけてつて、怒るだらう。そう考えたら、やっぱり早く帰らなきやつて思ひ。だけ。

だけ。

「咲良。夜が明けたら、北へ行つてみよう。君が歸れる手がかりがあるかもしない」

だけど、Hドワードがそつと聞いてくれても、俺には返事ができなかつた。

帰りたいとは、思う。

でも、なんとなくわかつてしまつたんだ。Hドワードは本当は、家族と一緒に穏やかな時を過ごしたいんじやないかつて。それを押し殺して戦つているんじやないかつて。

「……やっぱりいよ。俺もそれ、迷信だと思ひ」

え、とHドワードが小さく呟く。

背中を掴む手が、それと合わせて小さく震えた。

帰りたいのは嘘じやない。でも、もしも、もしも、自惚れかもしれないけど、もしも。俺がいることで、少しでもHドワードの寂しさが拭えるなら。

もう少しだけ、ここにいたい。そつと/oのも嘘じやない。

「だから、もうじめらへりへりへりへせ

「咲良……」

俺の名を呼ぶ声が、どこかまつとつて聞こえたのは、自意識過剰とこつやつだらうか。

でも、そのあと彼女が小ちくありがとつて呟いたのは、空耳ではないと思ひ。

翌朝、件の皆から連絡があつたとライオネルが伝えにきた……らしい。

昨夜一睡もできなかつた俺は部屋の隅つゝで爆睡していく、それを見つめたのは毎過ぎのことだった。

第一話 白い花と黒い服（前書き）

エドワード過去編。話は本編よりもシリアス・暗めです。全年齢の範囲内だと思われますが、もしかしたら際どい表現があるかもしれませんので、一切受け付けないという方はご注意下さい。三人称です。

第一話 白い花と黒い服

「良かつた、綺麗に咲いて」
空になるまで水差しを傾けて、独り言を呟く。水滴が煌く白い花
弁を映しこみ、少女は嬉しそうに群青の瞳を細めた。そして大きく
息をつく。

今日はよく晴れている。

屋外で体を動かしていると暑いほどで、額には汗が滲んでいた。
黒い前髪がべたりとはりついて気持ちが悪い。水差しを置いて手で
乱暴に顔の汗をこすり、それからふと気がついて両手を見る。
土いじりをしていたので、両手には泥がついていた。

「……やつちやつた」

近くに鏡はないが、今自分の顔がどうなっているかは容易に想像
できる。小さく息をついて、少女は水差しを拾うと歩き出した。

「エレオノーラ様！」

だが呼びとめられて、少女は足を止めた。気がつかない振りをし
ようかとも考えたが、ここまで大きな声で名前を呼ばれて気がつか
ない人もいないだろう。仕方なく振り向くと、見知った顔の女官が、
まあと眉を顰めた。想像していた通りの展開ではあるが。

「なんというお顔を」

「言わないで。今洗おうとしていたの」

「一体何をなさっていたのですか」

聞くまでもないだろうに。女官の声に咎めるような色がある時点
で、何をしていたかなど分かつているに違いない。だが一応、少女
エレオノーラは持っていた水差しをさらに田に留まるように持
ちあげて見せた。

「花の世話」

「そのようなこと、エレオノーラ様がなさらなくても。ああ、お召
し物も汚れて」

「あら本当。また怒られてしまつわ。だからドレスつて面倒なのよ
片手でスカートをつまんで嘆くエレオノーラの手から、女官が水
差しを取り上げる。

「……母上が大事にしていた花だから、私が世話をしたいの」
取り返そうとした手が女官が身を引いたことで空を搔き、エレオ
ノーラがむつと眉根を寄せる。

「とにかくお召を変えを」

「……わかつたわ。でも少し摘んでこきたいから待つて」

「エレオノーラ様」

「兄上にお見せするの。もう汚さないから」

止めようと立ちはだかる女官をひらりとかわし、エレオノーラは
軽やかに走りだした。

エレオノーラが花を持つて兄の部屋を訪れることができたのは、
たっぷり一刻が過ぎてからだった。着替えと小言の間に花がしおれ
るかと本気で危惧したが、どうにかそれは免れることができた。

「見て、エドワード兄上。綺麗に咲いたでしょ」

「……朝と服が違うな、エル」

だが兄から返ってきたのは花の感想ではなかつた。

「朝は白かった」

目を細めて花弁に触れながら、その言葉が花ではなく服を示して
いることに、気付くのが少し遅れる。

「また汚してしまつたのだるつ?」

「……ご明察恐れ入ります」

「それを選んだのは汚さないようになつたのか?」

「兄上には敵いません」

「黒もよく似合つ」

兄がそう言つと、妹は珍しく照れたように頬を染めてはにかんだ。

そうしていれば可愛らしいのにという言葉は飲み込んで、兄エドワードは、ベッドに腰掛けたまま手を伸ばして妹の長い黒髪を梳くように撫でた。その、濡れたように艶のある髪といい、色白ではあるが健康的な赤みの差す表情といい。美女の要件を兼ね備えているに関わらず、多少じゃじゃ馬の氣があるこの妹は、その表情も男性のように凜々しかった。少女のしおらしさよりも、少年のような荒削りの逞しさがある。髪を梳く自分の手が病的な白さと細さなのとは正反対で、面差しは良く似ているのに全く似ていないと、そんなことを思つてエドワードは目を細めた。

そんなエドワードの様子を、エレオノーラが怪訝な表情で見上げる。

「兄上？」

「……いや。花をありがとう。活けるものを」

立ち上がりかけて、だがエドワードの体はすぐにベッドに引き戻されることになった。体を折つて激しく咳き込む兄に、慌ててエレオノーラが花を置く。

「兄上！？」

「……だい、じょうぶ……」

荒い息の合間に零れた言葉は、酷く説得力がないと自覚してエドワードは苦笑した。だが口元を拭つてそれを納め、妹へと向き直る。

「済まない、エル。そろそろ稽古の時間だ。行かなければ」

「無理だわ、そんな体で。私、今日はじ容赦下さるよう父上に頼んで」

「大丈夫だ」

踵を返す妹の腕を掴み、さつきよりも強く、有無を言わせぬような声色でエドワードは今にも飛び出して行きそうな妹を止めた。

強い声と、強い瞳に、エレオノーラは仕方なく足を止める。

エドワードは小さく笑つた後に剣を取つて退室してしまい、エレオノーラは花を活けてから、主のいなくなつた部屋を出た。

第一話 H家の定め

その日はすつと、エレオノーラは気が晴れなかつた。

汚れが目立たないのは良いのだが、暗い色というのは気分まで暗くするようだ。エレオノーラはドレスのスカートに手を落とすと、小さく嘆息した。

「ねえさん、続きはまだ？」

そのスカートを引かれて、はつとすると。弟のねだるような目を見て、エレオノーラは慌ててその髪をくしゃりと撫でた。

「ああ、『めんなさいね、ライ』

本を読み聞かせている途中でぼんやりしてしまったようだ。不満な弟に詫びると、エレオノーラは本を持ちなおした。だがそんな姉を見て、弟はふと眉間の皺を解く。

「疲れてるの？」

「ううん、そうじゃないわ」

もう一度髪を撫でてから本に手を落とし だが、全く文字が目に入らずに、エレオノーラは本を閉じた。幼い弟は心配そうにこちらを見上げてきて、その不安を拭うように笑いかける。本を読むのは諦めて、エレオノーラは違う話題を探した。

「……ねえ、ライオネル。ちゃんとお勉強はしている？」

「なんで急に勉強の話するの？」

「ほら、その言葉使い。また父上に怒られるわよ」

「つ違いの弟は、未だにやんちゃで子どもっぽい。末妹のイザベラの方がしつかりしているくらいだ。だからエレオノーラにとつて、ライオネルは凄く歳が離れているように感じてしまう。咎められてむくれる姿を見ていると、その思いはますます強くなる。そんなライオネルは可愛い弟なのだが、ハーシュン家の次男であることを考えると、いつまでも甘やかしていくはいざれ辛い思いをするのは彼だ。

「あのね、ライ。私はあなたの元気で可愛いところ凄く好きだけど、

だからこそ貴方が父上に叱られるのを見るのは辛いのよ。ね？ 私の「」とは姉さんではなく、姉上と呼ぶのよ」

「……やだ。ねえさんはねえさんだもん……」

「我儘言わないの。……ほら、泣かない。男の子はすぐに泣いちゃダメよ」

すび、と大きく鼻をすすり、両手で一生懸命に両目をこするライオネルを見て、エレオノーラはその涙を拭うのを手伝つた。

「わかつたわ。一人だけのときは姉さんでもいいから。その代わり、ちゃんと姉さんの言「」と聞くのよ？」

「……うん」

「よし。ライは素直で可愛いわね」

「ホント！？」

そう言って微笑むと、ライオネルは嬉しそうにぱあっと笑つた。今まで泣いていたのはどこへやら、一転して元気になつた弟を見て、エレオノーラが目を細める。

「ええ。そんな風に、元気なライも大好きよ。……まあ男の子だもんね。勉強ばっかりしているより、元気に走つてた方がいいわよね」だが今度は、ライオネルの表情が沈んだ。百面相のようにころころ表情が変わるのは今に始まつたことではないのだが、理由が気になつてライオネルの沈んだ顔を覗き込む。

「どうしたの？」

「……でもぼく、戦に行くのは嫌だ」

その言葉に、父がライオネルの剣術を稚拙だと嘆いていたのを思い出す。そして、ハーシュン家の男は腑抜けばかりだと嘆いていたことも。

「馬鹿ね。ライは戦争なんかしなくていいのよ」

弟の小さな肩に手を回し、優しく抱きしめる。

ライオネルが剣を使うのを苦手とするのは、才能の問題もあるかもしれないが、根が優しいからだとエレオノーラは知っている。傷

つけることを恐れれば剣は鈍る。兄が、よく苦い顔でそう独白していた。

そんな思いを、この小さな弟にまでさせたくない。

「でも、嫌だなんて誰にも言つてはダメよ」

だが、囁くのは警告でなければいけなかつた。

ここヴァルグランドでは、隣国フレンシアとの戦争が百年以上も続いている。打倒フレンシアこそがヴァルグランドの悲願であり、ヴァルグランドを統べるハーション家の唯一無二の目的だ。その為に血を流すことを喜びとしても、厭つてはいけない。それがこの家に生まれた定めなのである。

しかしそれでも、エレオノーラは弟を戦わせたくはなかつた。弟が戦を嫌つているなら、その方が嬉しかつた。そして、同じくらいに兄にも戦つて欲しくなかつた。

表されたにはされていないが、エドワードの体は病魔に蝕まれていた。訓練や剣の稽古など病の身には過酷だらうし、寿命を縮めかねない。ずっと気が晴れないのもその所為だつた。ひどい咳をしながらも、剣を持つて立ちあがる姿が頭から離れず、胸が苦しい。

「……あ。 そうだわ」

だが唐突に、エレオノーラはそんな声を漏らしていた。

「嫌だ。 どうして今まで気付かなかつたのかしら」

ライオネルから手を離し、両手で両頬を押さえる。

とても素晴らしいことを考え付いたのだ。今まで思いつかなかつたのが不思議で、それが悔やまれるくらい、素晴らしいことを。

「……ねえさん？」

「ライ、ごめんね。用事ができちやつた。 続きはまた後で」

怪訝そうに呼びかける弟に構わず、エレオノーラは立ち上がると部屋の扉に手をかけた。だがその途端、扉は押してもないのに突然開いた。

「ねえさん！」

もろにバランスを崩したエレオノーラを見て、ライオネルが顔色

を変えて立ち上がる。だが、彼が危惧するような事態は起こらなかつた。ぐらりと傾いた体が受け止められたとき、来訪者の存在とそれが誰であるのかを知る。

「ノックもしないで済まない。早く会いたくて 大丈夫か?」「レインハルト。戻つていたのですか」

体を起そうとするが、やんわりと腕の中に引き戻される。それにさりげなく抵抗を示しながら、エレオノーラは幼馴染の青年を見上げた。

「ああ、ついさつきな」

「ローデルフィールはどうでしたか?」

「王都よりずっと華やかで活氣がある。君にも見せたかったよ
そうだ、渡したいものがあるんだが」

ふとレインハルトの視線が外れ、エレオノーラがその先を追うと、毛を逆立てた猫のようにレインハルトを威嚇しているライオネルと目があつた。

「……明日、私がエンズレイに伺います。先ほど戻つてきましたばかりなら、疲れているでしょう? 今日は休んだ方がいいわ」「見つめる先で、レインハルトの整つた顔が不満そうに歪む。だがすぐにふつと相好を崩すと、レインハルトは手を離した。

「では、待つているよ」

扉が閉まる音に隠れて、エレオノーラは嘆息した。だが弟の視線が刺さつて、そちらを振り向く。

「ぼく、あいつ嫌いだ」

「ライ……、そんなことを言つてはダメ。私はいざれエンズレイに嫁ぐの。レインハルトは私の義弟になるのよ」

「どうして?」

その疑問が、エンズレイに嫁ぐ理由か悪口を言つてはいけない理由の方を計りかねて、一瞬エレオノーラは口ごもつた。だが、恐らく両方に對してだろう。

「レインハルトの兄上が、私の許嫁だから。エンズレイの嫡男と結

婚するのがハーシュン家長女のしきたりだからよ。それと、誰でもうつと人のことを悪く言つてはいけないわ」

「ねえさんはそれでいいの？ 要するに、好きだから結婚するんじゃないんだろ？」

幼い弟の口から出た大人びた質問に、エレオノーラは今度こそ答えを失う。とはいっても、ライオネルはまだ十歳になつたばかりだ。そういう深い意味のある質問ではないとわかっているのに、戸惑つてしまふ。

「……でも、嫌いじゃないわ。それより、急いでるから。あとでね」早口で言い残すと、今度こそエレオノーラは部屋を後にしてしまった。

第三話 剣と髪飾り

寝苦しさでHドワードが目を覚ますと、太陽は既に一番高い位置を越えていた。

慌ててベッドを降りようと起き上がるが、それだけの行為が訓練よりも苦行だった。全身に錘でもつけられているように酷く重い体は、自分のものではないようだ。そんな経験は初めてではないが、今日は一等酷かつた。

はげずるようにしてベッドを抜けると、剣を手に取る。その重さと言つたら、平常時の人一人を抱える以上に思えた。ひきずりながら部屋を出て、壁に手をついてホールへと向かう。だが、不意に聞こえてきた音に、Hドワードは歩みを止めた。

その音は、剣のぶつかり合つ音。

(稽古が始まっている?)

そんな馬鹿なことがある筈がない。軍の訓練ではなく、今から行われる筈のものは自分の為の個人的な稽古だ。階段を降りるのをやめ、Hドワードは体をひきずつて、吹き抜けから下の階を覗きこむ。体が凍つた。

そこには自分がいた。

肩までの黒髪を翻して、軽々と体を動かし、戦う自分。まるで、いつもの稽古を客観的に観ている感覚に捉われる。だが、違う。もう自分はあんなに活き活きと動ぐだけの体力がない。そして何より、自分はHドワードではないのだ。

「……エレオノーラ……ッ」

その名を歎みしめるように呼び、引きずついていた剣を碎かんばかりに握り締める。

運動した後の心地よい汗を拭い、エレオノーラは自室へと向かっていた。足がもつれそうなほど疲労していたが、その疲れもまた心地よいものだつた。昨日くすねておいた兄の服も、ドレスよりずつと動き易くて気に入つていた。

「もつと早くこうすれば良かつたんだわ」

疲れも忘れてスキップでもしたい気分だつたが、それを思うと悔しくもあつた。もつと早くにこうしていれば、兄の病があそこまで悪化することもなかつたろう。

よく兄の稽古を覗いていたので、剣の持ち方も振り方も知つていだし、思つたよりずっと巧く戦えた。褒められることさえあつた。それほど剣術がやりたいわけでもなかつたが、褒められれば悪い気はしない。戦は嫌いだが、純粹に剣を振るだけならば楽しいと思つた。うまく隙をついて剣を繰り出す駆け引きは、エレオノーラにとってゲームやスポーツに近い感覚だ。それらとて、女性である自分には縁のないものであるから余計に楽しい。

部屋に戻つてベッドに飛び込み、そのまま眠つてしまいそうになつて　だが、大事なことを思い出して睡魔に抗い、起き上がる。

レインハルトと約束していたのを思い出した。

面倒だが、すっぱかせば押し掛けてくるのは日に見えている。しぶしぶ着替えようとして、服を脱ぎかけて、だがやめる。　また、良いことを考え付いたのだ。

元通りに服を直すと、エレオノーラはその格好のままで部屋を飛び出した。

今のところ、誰にも気付かれていないのだ。レインハルトだつてこの格好を見れば、きっとエドワードだと思つに違ひない。兄との見分けもつかないのかと言つてやつたら、いつも余裕綽々なあの笑顔はどんな風になるだろうか。

楽しい悪戯を思いついた子供のような目を輝かせ、エレオノーラは城を出ると、すぐ傍に居を構えるエンズレイの屋敷へと向かつた。エレオノーラのハーション家とエンズレイ家は旧くからの付き合い

だ。親の代からとか、そういうレベルの旧さではない。ヴァルグランドが興ったのと時を同じくして、エンズレイはその長きに渡つてずっとハーションに仕えてきた。ハーションとエンズレイは、いわばヴァルグランドの光と影なのである。

「これは、エドワード様」

エンズレイの使用人達は、こちらの姿を認めるや否も、各自の作業を中断して敬礼をする。彼らがこちらをエドワードと呼んだことに内心でほくそ笑みながら、エレオノーラは片手で礼を解くよう促した。

「私的な用事だ。レインハルトはいるか」「は……、しかし……」

「通るぞ」

彼らが言い淀んだ理由は想像できる。恐らく、今日来るのは『エレオノーラ』の方だと聞かされているのだろう。だがそれを理由に『エドワード』の訪問を断ることなど使用人にはできない。彼らの間を悠々と行き過ぎ、エレオノーラはレインハルトの部屋を訪ねた。

「…………」

「久しいな、レインハルト。エレオノーラからの伝言だ。今日は所用で来られぬと」

出迎えたレインハルトに、しゃあしゃあと述べる。それを見て、彼は形の整った眉を寄せた。

「……なんのつもりだ」

「え」

まさか見破られるとは露も思つていなかつたエレオノーラは、彼の言葉の意図を計り損ねた。

「まさかオレをたばかる為だけに、その髪切つたわけではないだろうな」

だがそこまで言われれば、エレオノーラも気付かないわけにはいかなかつた。ただの一瞬たりとも、彼を欺くことはできなかつたところだ。

悔しさに唇を噛む」ひらりを尻目に、レインハルトが服の中から何かを取り出す。

「……あ

綺麗に包まれたそれが、渡したいものである」とは想像がついた。恐らくは、ローデルフィールからの土産だろう。だが、レインハルトがその包みをとき、現れたものを見てエレオノーラは思わず声を漏らした。

「何より、オレが君を見分けられぬと思われていたのが心外だ。この礼はいつか必ずするぞ……エレオノーラ」

氷のように薄く、鋭く、冷たい声と共に、レインハルトが手にしていた髪飾りを握り締め、碎く。
だが謝罪の言葉は、口に貼りついたまま、どうじても表には出なかつた。

第四話 遊く者の願い

陰鬱な気分で、エレオノーラは帰途についていた。先ほどの浮かれた気分は、すっかり消え失してしまった。何人かに、エドワード様、と呼びとめられたが耳に入らず、真っ直ぐ自室に向かって扉を開ける。

「何処に行つていた、エレオノーラ」

誰もいないと思っていた薄暗い部屋から声があり、エレオノーラはびくりと肩を震わせた。暗がりから現れたエドワードと、鏡合戦のように向き合う。ただし、表情は対照的だつた。

「……兄上……？」

いつも穏やかなエドワードのそんな表情を、エレオノーラは見たことがなかつた。双眸から吹きこぼれそうな感情は怒り以外に例えられず、だがその理由がわからない。レインハルトを怒らせたことは、たばからうとした頭があるから仕方ないと思っていた。だが兄に怒られるような謂われはない筈だ。

元はと言えば、調子の悪いエドワードの代わりに剣の稽古を受けようと思つたことがきっかけなのだ。もちろん頼まれたわけではないし、感謝して欲しいわけではないが、怒られることでもないと思う。それなのに。

「自分が何をしてるのか、解つているのか……？」

ぞつとするような声色と共に、エドワードが手を伸ばす。産まれて初めて兄を怖いと思つた。咄嗟に避けようとしたがそれは許されず、強い力で肩を押されて、エレオノーラは強かに床で背中を打つた。とても病に冒されているとは思えぬ力だった。それに怯んでいる間に、もがく体を押さえられて無理やり服を剥ぎ取られる。

「兄上ッ、やめ

「すぐに着替えるんだ。異端裁判にかけられたいのか」

だが出かかつた悲鳴は、兄の表情を見て消えた。エドワードの手

から力が抜けると同時に、エレオノーラも抵抗しようとした手を止める。

女が戦に出ることも、男装することも、宗教的觀点から異端者とみなされる。その末路は、異端裁判にかけられ、大方が火刑に処される。裁判などとは名ばかりのものだ。異端は等しく許されない。

「エル……」

母が逝つてからは、もはや彼しか呼ぶ者のない愛称を優しい声で呼ばれ、もう拘束はされていなかつたがエレオノーラは動けなかつた。覆いかぶさるようにして、エドワードが一度は離した手を頬へとあてがう。わつときのよつた力尽くではなく、愛しむよつて、優しく。

「私はもうすぐ逝く。だがお前には幸せでいて欲しいんだ」

静かな声に、エレオノーラは息を飲んだ。少しづつ、夜の闇が部屋を侵食していく。

頬から髪に手を滑らすと、エドワードは短くなつてしまつたそれを惜しむように撫でた。

「いいが、一度とこんなことはするな。お前は周囲を気に掛け過ぎだ。自分を顧みることも覚えた方がいい……」

もうその頃には、恐怖など消えていた。むしろ、一時でもそんな感情を持つた自分を嫌悪すらした。

髪に触れる手に手を重ねる。その体温が、消えてしまふなど信じられないことだった。信じたくもなかつた。

「兄上……」

掠れた声で呼ぶと、手から温もりは離れた。エドワードが立ち上がり、エレオノーラも体を起こす。だが、足に力が入らず、立ち上がるることはできなかつた。

「乱暴なことをして済まぬ。だがお前はこいつらにしないと聞かないとどう」「詫びながら差しだされた手に、手を伸ばしかけるが掴めない。

「……嫌だ。もう置いていかないで」

母を失つたときの虚脱感に襲われ、伸ばそうとした手を引きよせて、エレオノーラは膝を抱えた。そうして涙を堪える。

誰かを失うのは、もうたくさんだ。なのに、兄は病魔に冒され、父は戦場へ行く。例えば何かの奇跡が起きて、兄の病が治つたとしても、結局は戦場へ行つてしまうのだ。馬鹿げていると思つ。それを止められるならば、どんなことでもするのに。

せめて、今ある家族を守りたいと思つのに、それすらも許されない。

済まないと、小さく紡がれた声を、エレオノーラは聞こえない振りをした。

エレオノーラの長い一日は、まだ終わらなかつた。

エドワードが出ていつてから、いつの間にか眠つてしまつていたらしい。だが、ノックの音に目を覚ます。

服を着ないまま寝ていたので慌ててドレスを探すが、すぐに入と会うのは無理だ。体裁を整えることを諦め、エレオノーラは扉の外に短く問い合わせた。外の暗さと大体の感覚から察するに、もう夜更けだ。身支度など整つていのが普通だらつ。

「誰ですか？」

「フィオラにござります」

侍女の一人の名を聞いて、エレオノーラは益々怪訝な顔をした。

身内ならともかく ことライオネルは、よく眠れないと夜更けに部屋を訪れてくる 、侍女がこんな時間に部屋を訪ねることなどそうはないことだ。

「何？」

「陛下がお呼びです。すぐにエレオノーラ様をお連れするようことがきりと、心臓が大きく脈打つた。さつと顔から血の気が引いて、体全体が冷えて行くのが自分でもよくわかる。

父に呼ばれる」となど、稀にもないことだ。それでも、それが今日でないのなら、何の用事かと思つたくらいだらう。だが、今日といつ日がエレオノーラにとつてはまずかつた。

もしかして、今日一日、エドワードに成り代わっていたことが父に知られてしまったのかもしぬ。

父がそれを知る機会がいつあつたのかは不明だ。だが、厳格な父は娘だからと特別扱いするような人間ではない。容赦なく異端裁判に突きだすことくらいはするかもしぬ。誰かに指摘されるよりは、自ら汚点を切る方がデメリットは少ないと父なら考えるだらう。「エレオノーラ様？」

返事をしなかつたためだらう。今一度名を呼ばれ、我に返る。

「今、行くわ。ごめんなさい、支度を手伝つて貰える？」

兄の服をベッドの下におしゃつて、エレオノーラは震えを押し殺してそう返事をした。

第五話 王の画策

フィオラに手伝つてもらつて身支度を整え、エレオノーラは一人で父の私室へと向かつていた。

肩で切つてしまつた髪はどうにか結いあげてもらい、簡単にだが化粧も施してもらつた。そうしてドレスを着れば、もうエドワードの面影はなくなつてしまつ。それを何度も確認してから、だが拭えぬ不安と共にエレオノーラは部屋を出た。

父とはいえ国王に会うのであるから、身なりを整えることはおかしくない。だが夜更けの急な呼びつけに、平素ならここまでではしなかつた。しかしそれを勘繰られることよりも、短くなつた髪からエドワードを連想される方が今のエレオノーラには怖かつた。

支度に手間取つてしまつたので小走りに父の私室へと向かい、騒ぐ胸を落ち着かせながら扉を叩く。

「父上、エレオノーラにござります」

動搖を悟られぬよう毅然とした声で名乗り上げると、入れ、と低い声が返ってきた。父の部屋に入るのは、初めてではない　といふ程度にしか訪れたことはないが。概ね、記憶と変わつたようなところはない。城のどの部屋より広く、天井も高く、父王は飾ることに興味がないため、調度品も装飾もほとんどない。目につくのは剣や鎧などの武具ばかりで、王の私室といつよりまるで練兵場のような印象を受ける。

「このよろな時間に、一体どのような用で

問い合わせは遮られた。足元で重い音がして、そちらに気を取られたからだ。

「父上……？」

足元に投げて寄越されたものを見て、父の意図がわからずエレオノーラは戸惑いの声を上げた。

「抜け」

返ってきたのは答えではなく短い命令で、ますますエレオノーラは狼狽する。放られたのは、一振りの剣だった。訳もわからず立ち尽くしているうちに、ぴり、と空気が震えた。実際に震えたのではない。もっと感覚的なものに近い。確かにそこにあるというものではないが、確かに肌を撫でて行くそれは

きっと、殺氣と呼ばれるものだと。気付いたときには父は既に剣を抜いていた。

「……ッ！？」

何かの冗談だと思った。相手が父ではないのなら。

反射的に剣を拾っていた。冗談でないのなら、そのまま立つていれば斬られるだけだ。

やはり今日の一件が露見したのだろうか。それで異端裁判にかけるまでもなく、この場で処分しようというのか。ぐるぐるとぐろを巻いていた思考は、だが剣に触れた瞬間に消えた。それから剣を抜いたのは、何かを考えることではない。

死にたくないとか。抗いたいとか。

そんなことも考えていなかつた。ただ冷静に、こちらに向かう剣の切つ先に視点を当てる。

それが振り下ろされて、真っ向からそれを止めれば、力で押し負けるのは確実。ならば選択は一つ。受けて捌くか、避けるか。ただし避けるならぎりぎりまで引きつけてからでないと、追隨されてしまう。だが、歴戦の父の剣をうまく捌くことなど至難の業だ。

（だとしたら、道はひとつ）

こちらに向かってくる剣に対し、まっすぐに剣を構える。振り抜かせて、その隙を狙う。技術のない自分にはそれしかない。だがただ避けるだけなら、臆さず集中すればできぬことはない筈だ。

父が剣を振り上げる。無駄な動きなど一つもないからこそ、その軌道ははつきりと読める。実の娘に対し、一分の迷いも躊躇いもない。だがそれもまた予測していたことだ。

（まだだ）

恐怖は棄てる。焦燥も棄てる。必要なのは、どこまでも細く研ぎ澄された神経と、集中力。

切つ先が視界から消える。自分の脳天に迫るそれが、いつ自分に触れるかは、あとは感覚で推し量るしかない。

「 ッ！」

ふと風を感じたその瞬間、右足を軸にして左足のみを引く。髪を結っていた紐が切つ先に触れて、ばさりと髪がおちる。そのうちの数本がが宙を舞う頃には、エレオノーラは手を返していた。剣を振り下ろすのに、こちらもまた躊躇いなどない。研ぎ澄ませた神経に、余分な感情の入る余地などなかつた。だから、手が震えたのは剣を振り抜いてから。

「 ……あ……」

手じたえはなかつた。そして、目の前には既に父の姿すらなかつた。

だが首筋に圧力を感じて、呆けたような声を出す。視線だけを滑らせると、父の剣の切つ先が首元に触れていた。体が強張るが、自由はすぐに返つてくる。

「……やはり、昼間のあれは、お前か」

「見て……おられたのですか」

父が剣をおさめるのを見て、エレオノーラは深く息を吐き出しながら思わず首筋に触れていた。切られたのではないかと思うほど威圧だつたが、手には血の一滴すらもつかなかつた。

「私は、異端裁判行きですか」

「 それにはあまりに惜しい」

覚悟と共に問うた声に、返ってきたのは思わず言葉だった。

「エレオノーラ。剣を手にしたのは、今日が初めてだな？」

「 はい……」

確認に近い問いかけに困惑したまま頷く。しばらく返事はなく、エレオノーラはうなだれていた頭を上げた。そこにあつた父の顔にあるのは、いつも取りつく島もない厳格さでも、冷たさでもなく。

哀しみ。いや、憐れみ。

そのような父の表情を、エレオノーラは未だかつて見たことが無かつた　否、一度だけ。

母が死んだ、あの日見せた顔とよく似ていた。

どうして父がそのような顔をするのか理由がわからず、困惑ばかりの娘の傍まで王は歩み寄る。

「　エドワードはもう長くないだろ？」

「…………」

「しかしライオネルは未だに剣を取らうとせん。ハーシュン家の男は腑抜けばかりだ」

「…………」

父の嘆きに、エレオノーラは唇を噛んだ。兄も弟も好きだから、そんな言葉は聞きたくない。だがそれに反抗できぬ程度には、エレオノーラは父のことを嫌えなかつたし、ハーシュン家を憎めなかつた。結果、何も言えないエレオノーラの双肩に父王が両手を置く。

「お前は今日より剣を取れ」

「…………」

「私が教える。そして、来るべき日には、お前がエドワードになるのだ」

「仰つている意味が、解りません」

肩が壊れそうなほど、父が両手に力をこめる。だがその痛みもどこか遠いものに思えていた。

そして吐き出した言葉は嘘だった。

エドワードの代わりに戦うことには依存はない。しかしそれはこの国ひいてはグラン・ルゼリアの宗教観が覆らない限り不可能なことだ。それに、父が言つことはきっと、自分が認めたくないこの向こうにある。

「エドワードはもう長くない。エレオノーラ。エドワードが死ぬ日は、お前が死ぬ日と覚悟しておけ」

それを痛いほどはつきりと突きつけられ、エレオノーラは戦慄し

た。

だがそれに抗う術を、彼女は持たなかつたのである。

そして数年後、その運命の日は訪れる。

第六話 生く者の葬儀

すまない、エル。

それが、最後の言葉だった。

安定していた戦況は、フレンシアにリディアーヌという少女が現れることで一転した。王都を目の前にして、快進撃を続けていたヴァルグランド軍が、弱冠十六歳の少女が率いた兵を相手に大敗を喫したのである。それを機に、状況は一気に逆転した。

奪つた領土は次々に取り戻され、今度はヴァルグランドが侵略される側に回ると、国王エドワード七世は自らが出陣した。

そして、数年に及ぶ激しい攻防の末、ついにリディアーヌは捕えられた。そして、救世主としてフレンシアの民に希望を与えた聖少女は、ヴァルグランドの異端裁判にて火刑に処された。その事実はフレンシアに絶望をもたらし、同時にヴァルグランドへの憎しみも募らせた。

一方ヴァルグランドも、リディアーヌとの戦いにこそ勝利したものの、その代償は大きかった。いくつもの砦がリディアーヌによって落とされ、国王は重傷を負つて王都へと撤退。なにより目の前であつた勝利が消え去つたことに、ヴァルグランドの民は大いに疲弊していた。

その結果、ヴァルグランドの誰もがハーシュン家長子エドワードの出陣に期待を寄せた。

歳は若いが、エドワードは軍人として優秀であった。戦の天才と言われた父の剣才とカリスマを余すことなく受け継いだ彼は、怪我によつて一線を退いた父に代わり、出陣の準備を進めていた。彼らこの状況を開拓できるとヴァルグランドの民全てが信じた。

しかしそれを嘲笑うかのように、フレンシア王国ノイシス地方で

再びリディアースを名乗る少女が現れたのである。そしてまた彼女によつて、拮抗してた戦況はフレンシアの優位に転がる。フレンシアでは、復活したリディアースを誰もが神聖視し、讃え、そして希望を見た。

そんな折の、ヴァルグランの劣勢に追い打ちをかけるようなエドワードの病死だった。

「」のことが公に出れば、ただでさえ疲弊している兵や民は再起できなくなる。そう判断した国王の命により、エドワードの危篤は、ごく限られた腹心と身内にのみ告げられた。そして父と兄弟達が見守る中、静かにエドワードは息を引き取つたのである。

「葬儀は略式で執り行つ。戦況は逼迫している、すぐに準備をしておけ」

その死を確認するや否や、国王は短い言葉を残して踵を返した。その言葉が誰に向けられていて、何を意味するのか、エレオノーラには解っていた。しかし声が出なかつた。

「あなたと言つ人は！」

ようやく絞り出した掠れた返事は、だがライオネルの激昂に搔き消される。

「息子が死んだといふのに戦のことですか！　あなたにとつては、僕たちも駒と同じなんだ！」

悪意に満ちたライオネルの叫びに、父王は足を止めた。

「そうだ」

「……ッ」

一分の迷いもなく返ってきた冷たい返事に、ライオネルが拳を振りかぶる。だが、父を打ち据えるはずのその拳は、彼が振りむいたことによつていとも簡単に止まつてしまつた。

「部下とお前たちの命に差などない。戦場では私を庇つて誰かが死のうとも、その屍を踏みつけても剣を振るうといふのに、どうして肉親の死にだけ戦を忘れて涙など流せる？」

真つ直ぐにライオネルを射抜く眼光には、言葉どおり涙の一滴もなかつた。ただ寒々しく、ただギラギラと滾るようなその目に、ライオネルが一步も動けずに入る間に父王は退室していく。

「……ライ。彼は私達の父ではなく、王なのよ。ハーシュン家に生まれた以上、そのくらいは弁えなさい」

凍りついたように動けない弟を、エレオノーラはやんわりと諭した。それに重なつた声は、しかしライオネルのものではなく。

「エドワード兄上が亡くなつた今、兄上がハーシュン家の長男なのです。そのような弱氣では困りますわ」

田元の涙を拭いながら、イザベラがキッとライオネルを睨む。その台詞を聞いて、エレオノーラは意を決して口を開いた。

「……ライオネル、イザベラ。今から私が言つことによく聞いて。とても大事なことなの」

イザベラの言は確かに正論でありながら、今の状況には相応しくなかつた。

弟と妹の肩をそれぞれの手に抱き、エレオノーラは告げる。あの日、父から告げられたことを。

「病死したのは『エレオノーラ』。今から執り行われるのは、貴方達の『姉』の葬儀です」

弟達にとつて、それは予想もしてない言葉だつたのだろう。ぽかんとした四つの瞳に見つめられつつも、エレオノーラは彼らが理解するのを待つた。先に、イザベラがはつとしたように視線を落とす。

「そして私は、『エドワード』として出陣します。いいですね、もう姉と呼んではいけません」

「どうして!」

ここにきてようやく、ライオネルが悲鳴のような声を上げる。

「何故姉さんが戦に行くんだ! 兄上が亡くなつた今、僕が

」

「では、兄上に戦ができるとでも?」

イザベラが上げた鋭い声に、ライオネルが言葉を詰まらせる。

ハーシェン家次男でありながら剣もろくにあつかえない身である以上、兵を率いる能力も人徳もないことは本人が一番わかつていた。それでも納得できず、ライオネルが唸る。

「しかし……」

「しかしではありません。魔女の一件で民が疲弊していることなど、兄上にもお解りでしょう。今の状況では、家臣も民も兄上の死を受け止めきれませんわ。……そういうことですわよね、姉上？」

「……ええ。イザベラ」

まだ幼いのに、イザベラの口調はしつかりしている。だが、瞳は弱い。ライオネルは性格のきついイザベラを苦手としている節があるが、姉の目で見ればイザベラが無理をしているのは一目瞭然だつた。それでも甘やかさないのは、もうそれが許されない状況に置かれていることと、これからは傍で守つてやれないから。そして何より、イザベラがそれを許さないと思うから。

「姉上のご英断、妹として誇りに思います」

大人びた口調で贅辞を口にすると、イザベラもまた部屋を出て行つた。略式とはいえ、喪服へとドレスを着替えるのはそれなりに時間がかかる。そして、エレオノーラもまた、葬儀の傍ら兄が倒れたことで頓挫してしまつた出陣の準備も進めねばならなかつた。だが、ライオネルはまだ俯いたままだ。

「……ライ

「ごめん、姉さん」

そして彼が紡いだ言葉も、エドワードと同じ謝罪だった。ぎゅっと胸を掴まれるような思いがして、エレオノーラは弟の頭を抱き寄せた。

「どうして？」

「僕が、臆病だから。だから姉さんに辛い思いをさせる」

「それは違うわ。あなたがいるからやれるの。謝らないで 私は、嬉しいのよ

兄の身代わりを提示されたとき、逆らう術は持たぬものの、心は迷っていた。兄に代わって戦うことに依存はない。だがそれは、元をただせば兄に少しでも長く生きて欲しいといつ思いの為だ。死ぬことを前提とした身代わりはつらかった。

それでもエレオノーラから迷いが消えたのは、自分が戦えば、せめてライオネルを戦わせずに済むかもしないということだ。自分が戦うことで、また戦況が覆せれば。そして、この戦争を勝利に導けば、もう誰も戦わなくてもいい。

周囲の誰かを死地に見送ることしかできなかつた今までより、それはエレオノーラにとってずっと楽なことだった。

「嬉、しい……？」

「忘れないでライ。今日これより、この場所に私は女であることもエレオノーラの名も棄てて行く。だけど、貴方を案じている肉親がいることに代わりはないわ。私がエレオノーラであろうと、エドワードであろうと」

「…………」

「ライの優しいところ、私も兄上も大好きだつたわ。だから貴方はそのままでいて」

抱きしめる手に力を込めて、エレオノーラは最後の姉としての言葉を告げた。

そしてその日、ヴァルグランド王女エレオノーラの葬儀が、しめやかに執り行われた。

第七話 墓ちた英雄

領土を失い、国王が負傷し、そして王子を病で失いながらも、ヴァルグランドを絶望が襲うことは無かつた。

エドワードに扮したエレオノーラが初陣を勝利で飾り、勢いづいたヴァルグランド軍は、そのまま一気にフレンシアへと攻め上る。そして第二のリディアースが戦場で果てた頃には、ヴァルグランドに黒太子ありと囁かれるようになつていた。

「お帰り、姉さん」

一年ぶりに本国へと戻ると、再会するなり弟はそんな言葉を口にした。既に父王への挨拶は済ませて自室におり、夕刻も過ぎていたために他に人の姿はなかつたが、それでもエレオノーラは眉を潜めた。

「ライ……姉と呼ぶなど、言つてあつたはずだ」

「でも姉さんは、一人のときはそう呼んでいいと言つた」

「屁理屈を言つな、それはまた違う話だらう。全く、お前はいつまでも経つても子供だ」

だが、髪を撫でようと手を伸ばしてみれば、あることに気が付いてエレオノーラはその手を止めた。

「……随分と、背が伸びたな」

「いつまでも子供じゃないわ」

姉の手を取つておひさせ、苦笑するライオネルを見てエレオノーラもまた苦笑した。だがそれもすぐに消す。

「変わりはないか?」

「特には、イザベラも元気だし、父上の容体も落ち着いてる。……

ただ」

ふと、ライオネルは言い淀むように言葉を切つた。目だけでそれを促すと、視線も外される。

「ただ、なんだ」

仕方なく直接問うと、再びこちらを見たライオネルは、だがやはり言い難そうに口を開いた。

「このところ、よくレインハルトが来る」「なんだ、そんなことか……、お前、まだレインハルトが嫌いなのか？」

婚約の件はもう白紙だろ?こと言いかけて、しかしエレオノーラは神妙な表情に戻った。

「……そうだな。こうなつては、イザベラがエンズレイに嫁がねばなるまい」

「いや、そういうことじやない。それに、イザベラは嫁に行きたがつてるようだし姉さんが気に病むことはないと思うが」

「行きたがっている?」

「『戦好きの父上や弱つちい兄上より、エンズレイの殿方は魅力的』と言つていた」

エレオノーラは一瞬きょとんとしたが、すぐに可笑しそうに声を上げて笑つた。

「はは、逞しいな、イザベラは」

ライオネルは面白くなさそうな顔をしていたが、エレオノーラはひとしきり笑つていた。それから、無造作に防具を外して椅子に腰を下ろす。

「なら、別にレインハルトが来ていても構わないじやないか。元々、父上はレインハルトを気に入っていたようだし」

「それは どうだが」

ライオネルは尙も何か言いたそうにしていたが、それ以上何も言えないままにノックの音が会話を中断させる。しかしえレオノーラの短い返事の後現れた人物に、ライオネルは顔をひきつらせた。

「戻つたそだな、エドワード」

甘いテノールを聞きながら、エレオノーラは葬儀の日を思い出していた。

王家の葬儀とは思えぬほどひの、小さく静かな式。その中で、ただ淡々とエドワードとして振るまつてある間中、視線を感じていた。その主が誰か、想像がつくからエレオノーラは決してそちらを見なかつた。

欺ける自信のない者が、身内以外に一人いた。

「……久しいな、レインハルト」

顔を上げないまま、あくまでエドワードとして答えると、レインハルトはびくりと片眉を跳ねあげた。だがそれよりも気になるのは、嫌悪感を丸出しにする弟の方だ。ライオネルは馬鹿ではないが、我を忘れれば何を言い出すかわからない節はある。

「ライ、お前はもう下がれ」

その自覚はライオネルにとてあるのだ。有無を言わざぬ声で言つと、不満そうにしながらもライオネルは黙つて退室した。それを待ちわびていたかのように、レインハルトが口を開く。

「それで、まさかこの期に及んでオレを欺けるとは思つてはいまいな？」エレオノーラ

やはり と。あの葬儀の日から危惧していたことが現実となり、エレオノーラは口を引き結んだ。だが表面上は平静を装つ。

「何を言つている？」

しかしその平静も長くは持たなかつた。腕を掴まれ、椅子から無理やり引き上げられる。振り払おうとするが、力ではとても対抗できなかつた。びくともしないその腕から、それでも何とか逃れようとしながらレインハルトを睨みつける。

「髪が伸びたな、エレオノーラ。やはり長い方がよく似合つ

「だから、違うと」

声は最後まで続かなかつた。力尽くで腕を引かれたかと思えば肩を強く押され、バランスを崩した体がベッドの上に落ちる。

「……ツ！」

「これが男の身体なものか」

「やめろ、離せ！！」

「そんな大声を出して人が来たらどうする。」この姿を見られてもいいのか？」

口角を引きあげて笑うレインハルトに対し、一切の自由を奪われたエレオノーラにできた抵抗は、ただ目を逸らさず睨みつけることだけだった。

「こんなことをして、ただで済むと思うな」

「案ずるな。陛下には許可を頂いている」

返ってきた言葉に、エレオノーラは今度こそ余裕を失つた。そして耳を疑う。

「なんだと……？」

「オレは十数年、兄上からお前を奪うことだけを考えて生きてきた。その絶好のチャンスをオレが逃すとでも思つか」

唇が触れそうなほどに顔を近づけられ、エレオノーラは反射的に顔を背けた。だが無理やりに塞がれる。強引で一方的な口付けのあと、己の唇を舐めながら、レインハルトは愉しげに笑つた。

「名が売れすぎたな、黒太子。ルゼリアに目を付けられる前に、陛下はお前をオレに委ねてくれるそうだ」

「……ッ」

「つまり、お前はオレのものになつたんだよ、エレオノーラ」

「エレオノーラは、死んだ！」

唯一自由になる声を振り絞り、エレオノーラは叫んだ。それはレインハルトに向けたものもあり、己へと言い聞かせるものでもあつた。その名は棄てたものであり、その名で呼ばれることは、決してあつてはならぬことだ。

しかしレインハルトの表情は揺らがなかつた。

「そんなことは、オレが認めん。オレはずつと信じなかつた。お前が死んだなんてことを、どうして認められる……？」

だが言葉と共に、ぎりぎりと滾るようだつたレインハルトの瞳は熱を失つた。その途端、エレオノーラは全身から力が抜けて行くのを感じていた。

押さえつけられていた力がそこから離れても、動けない。

腕から外れた手が、頬を撫でる。それこそ、認めたくない愛おしさを伴つて。

「お前はエレオノーラだ。お前が棄て、忘れたというならオレが思い出させてやる」

何かを言おうと開きかけた唇は再び塞がれ、頬から滑り落ちた手が身体をなぞる。だけどそれが、やけに遠く感じた。

全てが「冗談のようだった」。

父の命令も、兄の死も、戦の喧騒も、そして今この瞬間さえも。全てどうでもいいことだ。どの道、父が決めたのなら逆らうことはできない。その術を、エレオノーラは知らない。

だけどそのまま自分はどこに流されていくのだろう。生きながら葬られ、だが棄てることも許してくれない。なら結局自分は誰なのだろう。

笞の出ぬまま、身を委ねる他の道が、エレオノーラには見つけられなかつた。

第八話 運命を壊す者

それからすぐに、またリディアースを名乗る者が兵を上げ、再びエレオノーラは前線へと戻ることとなつた。しかし、エレオノーラは内心そのことにほつとしていた。

決して戦は好きではない。純粹に剣術なら嫌いではないのだが、敵兵とは言えど人を斬ることには慣れなかつた。ただ、共に戦う部下を死なせることがそれ以上に耐えられなかつただけだ。全ては国と家のためと、そう割り切つて戦つてきた。しかし、その道の行きつく先など考えたことはなかつた。だから、父がその先に女性としての幸せを用意しようとしてくれたことは素直に嬉しい。なのに父に会つのもレインハルトに会つのも苦痛で、城には居たくなかった。確かに心のどこかには、恋に焦がれて愛に夢見るような、捨てきれない女性としての感情がある。不器用ながらも、レインハルトが自分を想ってくれるのも解つていてし嬉しくもある。だから決して悪い話ではないと思うのに、逢瀬の度に感じるのは、こんなものかという虚しさだった。

その感情の理由はわからないが、結局のところ、血に塗れた手と傷だらけの身体では、もう女としては生きられないのだと思つた。ならばいつのこと、黒太子として戦場で果てられればいい。

密かにそんな思いを抱きつつ、新たなリディアースの討伐へと向かつたが、死に場所を探しているうちにその戦も一段落ついていた。第三のリディアースを打ち破り、あとはその残党を一掃すれば終わる。そこまで漕ぎつけて、まだ生き残っている自分にエレオノーラは絶望を覚えていた。

何をしていても虚無感がつきまとい、軍議にも訓練にも身が入らなくなつっていた。戦況が落ち着いてくると、次第にそれらのことは弟がするようになり、エレオノーラは部屋に籠ることが多くなつていた。

今回の出陣にはライオネルも同行していた。止めたが勝手についてきたのである。だが強く止めなかつたのは、自分自身彼が傍にいて欲しいと思っていたからだ。何かしら心の支えがなければ立てないまでに追いこまれていた。

それなのに、世間は英雄黒太子などと持て囃すのだから、笑つてしまつ。

誰もいない部屋で、エレオノーラは一人、自嘲じみた笑みを零していた。だが扉の開く音がして、その笑みを苦笑に変える。

「ノックしろと言つているのに」

「ああ……」めん、姉さん

「姉さんもやめると……、本当にお前は成長しないな。成長したのは背丈だけだ」

「それは済まなかつたな」

苛々に任せてつい嫌味を零すと、皮肉めいた謝罪が返つてきた。それを聞き、自分のハつ当当たりに気付いてエレオノーラは立ち上がりて頃垂れた。

「いや、私の方こそ済まぬ。私がするべきことを、お前に押し付けてしまつて」

「いいんだ。何かしていないと、僕がここにいる意味がない」

「……ヴァスカーには戻らないのか」

苦笑したライオネルに、ふとエレオノーラはそんなことを聞いた。

ここに来る少し前に、ライオネルは父王からヴァスカー地方の領主を命じられていた。領主を務めるにはライオネルは年若かつたが、ヴァスカーは片田舎だ。ハーシェンの名があればどうにかなるが、その一言で追いだされたと言つてライオネルは笑つていたが。つまりは、相変わらず剣を取らない次男を見限つたということだらう。しかし勘当ではなく、田舎とはいえ領土を与え、ハーシェンを名乗ることを許しているあたりが父らしいと思つた。

「僕がいない方が、部下がうまくやるさ。それより姉さんの役に立

ちたい」

「こんな血なまぐさいこと、お前には似合わんよ」

「姉さんにも似合わない」

強い言葉で返され、エレオノーラは薄く微笑んだ。本當なら「ん
な危ない場所に弟を置きたくはないが、無理に帰せるほど今の自分
に余裕もなかつた。弟に弱いところなどは見せられないが、それで
もその存在があるのとないのとでは全く違う。

「ありがとう、ライ」

「…………」

謝辞を言つと、照れたように手を背ける弟を見てくすっと笑う。
風貌からは残念なほど可愛げが消え去つたが、そういう顔は幼いこ
ろと変わらない。

「さて……、そろそろノイシスを片付けておかないとな」

だがそんな微笑みは封じて、黒太子としての表情へと戻る。ここ
は最前線だ、甘えが許されはいけないだろう。だが、ライオネル
の方は照れた表情は消えたものの、どこか子供じみた表情はそのま
まだつた。

「まだ本国から指示は来ていない。戦況はこちらに優位のまま落ち
着いているし、ノイシスに残るフレンシア軍とてそう数はいない筈
だ。急くこともないだろう」

言つていることは間違つてはいけないのだが、正論を口にする割に
表情は弱い。そんな違和感に、エレオノーラは声を上げかけて、そ
してやめた。

「なら、お前に任せる」

そして言あつとしたことと別のこととを口にして、立ちあがる。

「どこへ？」

「見回りもかねて、外の風に当たつてくるよ。すぐ戻る」

「姉さん」

前を行きすぎた姉を、ライオネルは咄嗟に呼びとめていた。だが
足を止めて振り返る姉を見て、小さく首を振る。

「……いや。気を付けて」

ああ、と短く答えて部屋を出て行く後の姿は、やけに小さくてふらりと消えてしまいそうだった。呼びとめたのはそれを危惧したことだったが、もし姉がもうここに帰つてこないならば、その方がいい。

逃げたいといえば、どれほど無謀でも連れて逃げた。だけど、そのような弱みを彼女は決して見せるはないだろう。

そのことに少しの寂しさを感じながら、ライオネルは窓の外を見上げた。

見事な満月だった。

その夜、その月の下で、運命に翻弄された英雄はそれを壊す者と出会い。

第八話 運命を壊す者（後書き）

過去編はこれにて完結です。『』読了ありがとうございました。なお、日常シリーズや他の番外編などをまだこれから予定ですので、完結扱いには致しません。

雨に煙る帝都は混乱に支配されていた。立ち竦む者、座り込んで呆然とする者、行動は様々だが誰の顔にも生気がない。

そんな中を行き過ぎる男女がいた。

恐怖と絶望に噎ぶ帝都の住人とは違い、彼らの目には光があった。ただし、表情といえば、周囲とそう変わりはなかつた。

ふとそれを自覚した少女は、ただ足を前に出すことで心を振り切ろうとしていることにも気付いた。そして恐らく、隣を歩く人物もそうなのだろうと。彼は自分よりずっと早いペースで歩いて行くので、ときどき小走りにならないと追いつけない。それは、今余裕がないのか、元々そんな配慮をするような人物でないのかはわからない。或いは、両方なのだろう。だがそのことを指摘しなかつたのは、少女にそんな余裕がないからではなく、ただがむしやらにでも前に進んでいたい自分の気持ちが合致していたからだと思つ。

少女は小さく息を吐くと、すっかり強張つてしまつていた表情を緩めた。

「……あの」

小さく声を上げる。だが返事はなかつた。聞こえていないのか無視されたのか定かではないが、もう少し声を大きくして、返事を待たずに少女は先を続ける。

「泣いてもいいですよ?」

「は?」

今度はちゃんと聞こえたのか、それとも無視しきれなかつたのか。不可解そうな声をあげて、男は歩みを止めてこちらを見下ろしていく。端正な顔をしているが、その表情はいつも険しい。だけど、今はそれ以上に、少し悲しい。

「悲しいんでしょう? だってあんなに姉さん姉さんって言つてたのに。もう会えないんですよ」

少女も立ち止まる。

心を抉ると分かつていて、あえて「もう会えない」という言葉を選んだのは、自分を諭す為でもあった。

だからそれは自分に向けた言葉だった。言葉にしないと甘えてしまいそうだったから。そして、泣きたいのも自分の方であった。だが、男は小馬鹿にするように口元を歪め、それから視線を外してまた早いペースで歩き出す。

「悲しくなどない」

表情は見えないが、きつぱりとそんな言葉を投げてよこしてくれる。

「無理して」

「無理などしてない。……この世で一番大事な人が、唯一友と認めた男の傍で幸せになるんだ。これ以上に喜ばしいことがあるか？」

「……」

その言葉は筋が通っているし、納得できる。彼の大事な人は自分にとつて敵だから全面的に彼と同じだとは言えないが、彼の友は自分にとつてもかけがえない人だから、幸せであるならそれが一番望ましいと思える。

これで良いのだとは、思う。

自分の大事な人とも、これで永久の別れになつた。だけど、死んで後も戦うばかりの過酷な運命からようやく解放され、これで眠れるのだと満ち足りた顔をしていたことを思い出せば、そこにあるのは悲しみだけではないと思う。

だけど、それは納得できても、やはり別れは辛い。

だからやつぱり、無理をしていくと思う。

少女はもう一度声をかけようと顔を上げ、だが男の方が先に声を上げていた。

「小娘」

「は、はい。なんですか」

いつの間にかまた彼は立ち止っていて、少女も慌てて歩みを止める。その呼称について不満を言うのも忘れて応えると、彼は少しだ

け眉間の皺を緩めた。

「僕たちもここで別れよう」

「え……」

思わず動搖してしまつ。

共に歩む道でないことは解りきつている。そして、彼もまた自分にとつては敵にしかならない相手だ。その上、怒鳴るし愛想もないし、こちらのことは小娘呼ばわりだ。好意的な面などひとつもない。

それでも、今一人になるはどうしようもなく心細かつた。

「……お前はフレンシア王に会うのだろう。僕もヴァルグランドに戻らねばならない。フレンシアに入れば僕は身動きが取れなくなるから、別ルートでこのまま直接ヴァルグランドへ向かう」

なるほどそれは道理だ。

ヴァルグランドに帰る彼が、来た道を使ってフレンシア経由で帰ることにはデメリットしかない。フレンシア王都で別れれば、彼一人でフレンシアを出ることは困難だろう。ヴァルグランド人であることがバレてしまえば、 それも、彼はヴァルグランドの王子だ。囚われてすめばいいが、悪くすればその場で命がないだろう。

「お前は……一人で大丈夫か」

思わず言葉が降ってきたので、少女は考えを中断すると男を見上げた。だが彼はこちらを向いてはおらず、そのままどこか違う方向に向いている。

「だ、大丈夫です。来るときだつて一人で來たんですから」

慌てて自分も目を逸らし、そのまま彼を追いつめて歩き出す。

立ち止っている暇はないのだ。今は一刻も早く、この状況をフレンシア王に伝えなければならない。そして、無為な争いを止めるのだ。それができるのは、現状自分だけだ。慕い、従つていた絶対たる存在が消えた今、自分がすることはそれを嘆くことではなく、それに縋ることでもなく、遺志を継ぐこと。そう強く自分に言い聞かせる。

「さよなら

だが歩き出す背に、雨水が弾ける音がある。駆け寄つてくる足音に振りかえる前に、手を掴まれる。

「おい」

酷く無愛想な声に、だけビビリかほつとしている自分がいた。その理由はわからぬままに、掴まれた手に強く何かを押しつけられる。

「…………」

それが何かを確認して、少女は軽く目を見開いた。凝った金の装飾に青の宝石が嵌まつた指輪は、見覚えのあるものだった。

「どうして？ これ、お母さんの形見なんじや……」

「聞け、小娘」

戸惑いながら問いかけた言葉は、鋭い声に阻まれる。むつきほんの少し和らいだ表情は、いつも以上に険しくこちらを睨んでくる。

「姉上がいなくても、僕は必ず僕の力で、ヴァルグランドとフレンシアに平和をもたらしてみせる。そして堂々とハーション家の名と共に国境を越えて、それを返してもらいに行く。だから、待つていろ！」

そう怒鳴りつけられて、少女は目を見張った。

その刹那、たくさんの記憶が脳裏にフラッシュバックした。

目の前で焼かれた故郷。奪われた家族。そんな混乱の中助け出してくれたひと。あの日から、ずっと敵国を憎み、抗い続けることで自分を保っていた。

だがそれらはすっと消えて行き、目の前には、一瞬にして驚くほど見違えてしまった青年だけが残る。

彼は敵国の王族で、ずっと憎み続けてきた筈なのに。今はビビを探してもそんな感情が見つからない。そのことに少しごく感心ながらも、少女はぎゅっと指輪を握り締めた。

「…………その前に、私が返しに行つてあげるわ！ シスコン貧弱男になんて負けないんだから！」

「僕はシスコンじゃない！」

わざと減らず口を叩きつけると、彼は眉を吊り上げてそんなこと

を叫ぶ。これでは先ほどの決め台詞も台無しだ。それがなんだか可笑しくて、少女は零れそうになる笑みを押しとどめた。

「じゃあ、私のこと小娘って呼ぶのもやめてください」

そう言い捨てて、少女は男に背を向ける。そしてそのまま彼女は歩き出した。もつ、彼は追い掛けはこない。呼びとめはしない。気配は少しずつ遠くなっていく。

「なら次に会ったときには、せいぜいいい女になつていろ」

少し遠くに聞こえた声に首だけで振り向くと、その後ろ姿は思つたよりずっと向こうにあつた。なのに、何故か大きく見えた。

「……何よ。少しかっこいいじゃないの」

握り締めた指輪を掲げて、それから少女はまた歩き出した。そして自分に言い聞かせる。これらの別れは全て、終わりじゃないくて、始まりなんだ。

神の王国はもうない。聖少女も英雄もいない。だけど、憎しみが剣にも魔法にも勝るなら、その逆の感情だつて何より強くなれる筈だと。

そう信じて、少女はやがて走りだした。その顔には涙があつたが、同時に晴れやかな笑顔があつた。

ヒリしえの別れ

画面の文字に目を通し終えると、老兵は顔をあげて、ふうと重い息をついた。そしてペンを取り、新しい紙を取り出しかけて、そしてやめる。逡巡の後にペンを置き、そしてもう一度嘆息した。

これで、何度もやりとりになるだろう。だが、画面の内容はいたちごっこで埒が明かない。これ以上は、「彼」がなんらかの成果を持つて帰らない限りどうしようもなかつた。

だが時間はそう残されではない。

ヴァルグランド第一王子の言を信じるならば、敵も指揮官を欠いている。迂闊に攻めてはこないだろうが、だからといつてずっと手をこまねいているだけとは思えない。ルゼリアの支援がない今、攻められれば持ちこたえられないだらう。

「さて、どうしたものかの」

詮無い独り言を零したそのとき、じつと音を立てて蠟燭の炎が揺れた。ふと感じた気配に振り返る。そこには何の姿もなかつたが、老兵は口を開いた。

「……これは、お久しぶりです」

傍から見れば面白にしか見えない問いかけに、だが答は間を置かずして返つてくる。

「姿も見せず失礼。それくらいの力は残しておくれつもりでしたが、あまりに煩く呼びとめられたもので」

何もない空間から、微かに少女の声が返つてくる。苦笑交じりのそれに、老兵もまた目元の皺を深くした。

「それは残念ですな。しかし、そうまでしてこの老いぼれに会いにきて頂けるとは、思いもしませんでしたぞ」

体ごと声の方を向き、老兵が声に答える。相変わらずそこには何も見えないのに、老兵には白い髪に赤い瞳の少女が見えるような気がしていた。その、頑なな表情までもが。

「……聞きたいたことがあります」

「そして、それが崩れるのが。

「貴公はわたしのことをさぞ恨んでいたでしょう。貴公が開きかけたいた和平の道を閉ざしたのはわたしです。なのに貴公はわたしの下で戦う道を選んだ。いつ寝首を搔かれるかと思っていたのに……そんな素振りも見せなかつた」

「これは心外ですね。私は誠心誠意あなた様にお仕えしてきたつもりでしたが」

「そんなことは知っています。だから聞きたいのですよ」

焦れたような声は、暗に時間がないことを示していた。それに気付いていたからこそ、老兵はふつと表情を固くすると、片手で顔を覆つた。

「……そうですね。そう……最初は、或いは恨んでおつたやも知れませぬ。ですが、あなた様の傍で戦ううち、あなた様のひたむきさに惹かれていたのもまた事実です。王が無血の道を選んだところでも、うまく事が運んだという保証はない。この世の中に、正しい答など存在しない。そんな残酷な世界で、あなた様はご自分の信念を貫いた」

「買い被り、ですね。ですが、貴公がそう思つてくれているのなら、悔いなく逝けます」

「咲良様は、どうされましたかの」

ともすれば消えそうになる氣配を、繋ぎとめるかのように今度は老兵が問いかける。

「魂の本来在るべき場所へと戻りました。……全てが在るべき姿に戻ろうとしています。無為な争いは終わる。血はまた流れるでしょうが、今度こそそれは新たなる時代を告げるでしょう。ですがそこで声は言い淀んだ。だが、その時間もないことは、声の主が誰よりも知っている。すぐに言葉は継がれた。

「あなたもまた、この世界に在るべき魂ではないのでしょうか」

「やはり、気が付いておられましたか」

「でも、あなたは戻れないのですね。わたしの力でどうにかできれば良いと思ったのですが……」

「お気持ちだけ頂いておきます。私はもひ、この世界に長くとどまりすぎた。おそらく、こちらとの結びつきの方が強くなっているでしょう。それに、あちらに私の帰る場所は最初からないのですよ。老い先短い命は、あなた様の遺志を継ぐことに使わせて頂きたく思います。」「

答える声はなかった。

隙間風が行き過ぎ、消えそうな気配を攫つて行つてしまいそうで、老兵は目を伏せた。神経を研ぎ澄ませることで、消えてゆく少女の、それでも今確かにここにある魂を、最後の瞬間まで感じていようとした。だが、消えそうな声は、それでもまだどうにか声として聞こえてくる。

「多くは……聞きました。また、その時間もありません。ですが……あなたはそれで良いのですか。自分の世界でもない場所で、本当のあなたは何を拠り所とするのですか……」「

「拠り所など幾つもあります。王をお守りし、この国の剣となり盾となれたことも。あなた様と共に戦つたことも。咲良様と出会えたことも全て、この老いぼれの中で息づいておりますぞ。……しかし、そうですね。あなた様にひとつだけ、頼みがあります」

返事はないが、老兵は答えを知っている。目を開き細めると、彼は立ち上がり足を踏み出した。

「真咲。世界の狭間に置き忘れた名を、どうか、持つて下され」

手を伸ばすと空気が震えた。

その一瞬に、老兵は伸ばした手の先に微笑む少女の姿を確かに見えた。

「わかりました、マサキ。貴方がわたしの影となりこの軍を支えてくれたこと、わたしは忘れません。わたしがこの生涯でぶつかり合えた唯一の人よ。どうか……あなたの心が安らかでありますように」

それきり声は途絶えた。そして、立ちつくす老兵がじくら待てども、その声が再び耳に届くことはなかつた。

「……ゆっくりおやすみ、リディアーヌ」

田の奥に焼きつけた笑顔に、老人は慈しみを込めて呟く。
それが、聖少女と崇められ、死して後も剣を振るい続けた、少女の儚い最期だつた。

聖少女として異世界に呼ばれた、などとこいつどんでも体験をしながら半年が過ぎようとしていた。

思い出すにつけ、夢ではないかと今も思ひ。そしてそう思ひ度に不安になるのだ。あれが夢ではないと唯一証明する存在がエドワードが、ちゃんとこの世界にいることを確認したくなる。

あれから、彼女は俺の家で生活している。他に当てなんであるわけないから必然だつたとはいえ、家族にどう切り出したものかと、相当思案したものだ。結局、うまい話なんて思いつく訳がないので、ありのままを話すことになった。

けどそれはもう、一か八かの賭けだつた。いや、賭けにすらならない。こんな突拍子もない話、普通は誰だつて信じやしない。

とすると、俺の家族はよほど普通じゃないらしい。

母さん曰く、「嘘をつけないよう育てたのは私であるから、信じるのは私の義務」だそつだが、それ以前に頭がおかしくなつたことを疑わないのか。

まあ実際にエドワードがいる以上、彼女を放りだすこともできないつていうのはあつただろうけれど。異世界云々はともかく、俺が人攫いをするような人間じやないつてことくらいは、家族は信じてくれてると思つてゐる。

おまけに、エドワードは「こちらの言葉を全く理解できなかつた。俺が向こうで言葉に困らなかつたのは、リティアースの魂を持つていたからだ」と、リティアースが言つてゐた。つまり、こちらの世界となんの関わりもないエドワードに「こちらの言葉はわからないつてことだらう。

ただ、不思議なことに、俺だけは彼女が何を言っているのか解つた。向こうにいるときは少し感じが違つて、全くの日本語に聞こえるわけではないけれど、それでも不思議に何を言つているのか解るのだ。よくわからないけど、俺の魂がリティアースであることに変わりはないということなんだろう。

だとすれば、俺は向こうの言葉を話すこともできる筈だ。なのに、どうしてもそれはできなくなつた。多分これは、俺が日本語と向こうの言葉を使い分けている意識がないからだと思つ。

いちで家族と話しているから、日本語に意識が向いてしまうんだろう。何も考えなければ喋れるのかもしれないけど、意識して無意識になんてなれない。何度試しても、エドワードには通じていらないみたいだった。

そうして、何語だか分らない言葉を吐くエドワードと、それを真剣に通訳する俺を見れば、家族もとりあえずエドワードを保護するしかなかつたんだと思う。

イケメンが来たと喜んでいた姉ちゃんが、女だと知つて落胆したという騒ぎが落ち着く頃には、すっかりエドワードは俺の家に馴染んでいた。

全く知らない世界で言葉も通じず不安だりうに、エドワードが不安な顔を見せるることはなかつた。そしてこの半年で、彼女はすっかり日本語がうまくなつていて、母さんが元幼稚園教諭で、うちに知育玩具が多くなり、母さんの教え方が上手いのも幸いしただろうけど、それにしたつて上達が早かつた。頭良いんだなつて感心したら、「君とちゃんと会話がしたい」と真顔で言われて狼狽えた。
…まあそれはともかく。

言葉が通じるようになつても、戸籍のこととか、学校のこととか、問題はまだ山ほどある。当面生活はしていくても、病気になつたときとか怪我したときとか、不測の事態を考えればこのままでいい訳

はない。一応、母さんとそういうことについても話はしているけど、もう少しエドワードがこっちの生活に慣れて、こっちの国の仕組みとか制度について理解して本人と話しあつてからでもいいだろうということで落ちついている。聰明な彼女のことだから、そう遠い先のことではないと思うけれど。

母さんがそう言つのも道理で、明らかに彼女は無理をしていた。そこに不自然さはないけど、何が変かといえば弱音を全く吐かないことが逆に変だった。母さんですら薄々それを感じているのだから、俺には余計いつもの強がりじゃないかつて思える。でもそんなエドワードに、俺はかけるべき言葉が見つからなかつた。

というより、俺「が」怖かつた。

彼女が言葉を覚えたら、「本当は帰りたいんじゃないか」と聞いてしまいそうで。もしそれに頷かれたら、俺はどうしていいのかわからない。エドワードの強がりのような笑顔を見るたび胸が痛んだ。

俺は、戦いさえなければ、彼女は幸せになれるつて思つてた。それがいかに馬鹿で浅はかか、この半年で俺は嫌といつほど思い知つていたから。

あれから向こうの世界がどうなつたかは俺達に知る由もない。だけど、あれで全部円満解決つて思えるほど俺も馬鹿じゃない。今度はルゼリアとの間で戦争が起こつているかもしれないし、フレンシアとヴァルグラン্ডだつて、長年争つてきた相手を急に受け入れられる筈もないだろう。

そんな微妙な均衡の中で、きっとライオネルは戦つてゐる。それを考えば俺だつて辛かつた。最愛の姉を奪つた拳銃、俺が無茶やつてひつかきまわした尻拭いを、全部彼に押し付けてきましたのだから。

肉親であるエドワードは俺以上に苦しんでいる筈だ。

わかつていて何も言えず、だけど時間だけは穏やかに流れた。

彼女に何ができるかと考えれば、ただ傍にいることしかできなくて。

学校はさすがにやめられなかつたけど、俺はあれから部活をやめて、できるだけ早く家に帰つた。そしてできるだけエドワードと一緒にいた。俺が向こうの世界に行つたときは、彼女が傍にいてくれることで心細さから救われていたから。同じことを返すべりしか俺には思いつかなくて。

だから今日も、授業の終了と同時に、俺は早々に帰途につく。部活に未練はなかつたし、友達と放課後ふらふら道草食うこともなくなつた。最短コースで家に辿りついた俺は、家中でも最短コースでエドワードの部屋に向かう。そんな俺を、家族は過保護すぎるといふか笑う。エドワードの気持ちがちょっと分かつた気がした。

エドワードの部屋は、元は物置にしてた六畳程度の狭い部屋だ。けど必要な家具は姉ちゃんのチョイスで親が買つてくれて、その後さらに姉ちゃんの絶妙なレイアウトによりドラマにでも出できそくなくらい可愛らしく部屋になつてこる。姉ちゃんは元々そういうのが好きだけど、ザ・女の子の部屋とでも言おうか……、ピンク基調でフリルカーテンなこんな部屋で、エドワードはいいのだろうかと常々思つてはいる。が、不満と言わたところで俺は姉ちゃんには逆らえないの、敢えて聞いてはいけれど。

そんなエドワードの部屋のドアを開けると、ベッドと一体型になつているピンクのスチールの机の上で、珍しく彼女は居眠りしていた。傷を気にしてか夏でも頑なに肌を出さず、まだ半袖でも差し支えない陽気にそぐわないタートルネックのカットソーに覆われた肩が規則正しく上下している。

起こすのも悪いこと思い、そつと回れ右しかけた瞬間に、群青色の

瞳が開いた。

田を覚ましたエドワードが、机から顔を上げてこちりを見上げる。

「あ……咲良。お帰り」

そう言って彼女が薄く微笑み、俺は出て行くのをやめて内側からドアを閉めた。

「ただいま。えっと、起こして」「めん」

「いや、いい風が入るからつい転寝してしまった」

彼女の言う通り、開け放した窓から入る風がレースカーテンを巻き上げていた。

季節は秋に入り、残暑もようやく落ち着き始めていた。ヴァルグランドは寒かったから、きっとエドワードは暑さに強くないと思う。これからは少しほとんど暑くなると毎日ひたすら言つたり、やつぱりちょっとほつと見て見えた。

あんまり無理するなよって、言いかけてやめる。そんなことをしたら返つて無理しそうだった。

「……何してたの？」

代わりに他愛もない話を振る。気が利かない俺は他に話題も思いつけない。でもエドワードは微笑んだまま、机の上のノートを見せてくれた。

「漢字を覚えていたんだ。咲良の名前は、これか？」

そんなことを言しながら、エドワードが「桜」の字を差す。

「あ、いや。それじゃないんだ。俺の字は、当て字で……」

と言いつつ、エドワードが当て字の意味を知っているとも思えないでの、シャーペンを握るエドワードの手に俺は自分の手を添えた。そして、自分の名前を書く。

そうしながら、ふと彼女が真っ先に俺の字を覚えようとしてくれたことに気付いて顔が熱くなつた。そんな瞬間にエドワードと田が合つてしまつたもので、途端に恥ずかしくなつた俺は、乱暴に字を

書きあげて急いで手を離した。明らかに不自然だつたけど、Hドワードはそれより字の方に興味津津のようで、さうそく漢字辞典を引いている。

「へえ……、綺麗な名前だと思つていたが、意味も綺麗なのだな」「男の名前じゃないけどね。でもHドワードにそつ言つて貰えると、なんか嬉しいよ」

素直にそつ言つと、Hドワードがこちらを見て微笑んだ。その笑顔を見ながら、俺は前から気にしていたことをもう一度口にする。「名前といえば、本当にいいの？……Hレオノーラじゃなくて」俺がついついHドワードと呼んでいたせいで、彼女はすっかりHドワードで定着してしまつてた。後から訂正しようとしたのだけど、Hドワード自身に止められて、結局そのままだ。

「いいんだ。なんというか……恥ずかしいんだ、そつやつて呼ばれるの」

でも、レインハルトはそつ呼んでたけれど。この期に及んで嫉妬している俺の心を見透かしてかどつかは知らないけれど。彼女はふと手を伸ばすと、俺の胸に触れた。

「その名は、君だけが覚えていてくれ」

そう言つて笑つた、その笑顔は、いつかも見た泣いているような笑顔で。

胸が苦しくなる。

俺はいつになつたら、苦しみや悲しさから彼女を守れるような男になれるんだろう。戦いのないこの国では、物理的な強さなんて酷く無意味に思えた。だつたらどうやつて強くなればいいんだろつ。この世界に戻つてきて、ますます答えは遠くに行つてしまつた気がする。

だから、その手を引き寄せることしか俺にはできない。でもそれだつて、彼女の為じやなく、本当は自分の為なんじゃないだろうか。

「……咲良？」

「本当は、帰りたい？」

突然抱き締めた俺の真意を探るよう、Hドワードが俺の名を呼ぶ。そんな彼女に、俺はついに今まで怖くて聞けなかつたことを聞いた。聞かないまま道を探るのはもう限界だった。それでも答えが怖くて震えそうになる俺の腕から、彼女は顔を上げてまっすぐに俺の目を見た。

「言つた筈だ。君がいる世界がいいと

僕さの消えた強い瞳で、区切るよひはつせつと、Hドワードがそう口にする。

「勘違いしないでくれ、咲良。あのとき、私は君の手を振り払うことができた。だけど何度もやり直したつて私がそうすることはないだろう。例えライに恨まれても、この世界がどんなに私を拒んだとしても」

じんと、目の奥が熱い。

違う、これじゃ助けられてるのは俺の方じゃないか。

悔しくて死にそうだ。

俺が守ると誓つたのに。もう戦いなんてないのに、命の危険もないのに。それなのに俺はまだ、彼女に守られるのか。

「……ライオネルがあんたを恨むようなことなんて万一一にもないだろうけどさ。こんななんじや、俺が恨まれるな」

Hドワードが口にした名に、俺はあの険しい顔を思い出した。それでそんなことを呟くと、Hドワードが不思議そうな声を上げる。

「何故?」

「何故って、元々俺は恨まれてたよ。あいつ姉さんに手を出すなってしそつちゅう襲つてくるし、弱音を吐こうものなら容赦なく殴つてくるし。会談のときなんて左右一発だよ? あんときせつの中切れまくつて……」

「会談?」

……しまつた。

惨めな気分を振り切ろうと、調子に乗つて喋りすぎた。けどその失言を悟つた頃には、鋭い彼女はもう察してしまつてゐる。

「すまない。それはきっと私の所為だな」

珍しく彼女が頬を染めて俯いて、俺はその数百倍狼狽して裏返つた声を上げた。

「ち、違うよ！ あいつが勝手に誤解して……！」

顔が熱い。火が出そうというのはこのことだ。本当に発火するんじゃないかと思いつつ、俺は悲鳴のように叫ぶ。

「誤解？」

「だ、だつてあれ、さよならつてことだつたんだろ？ もう会わないつもりだつて言つてたじゃないか」

俯きながら、もじもじ伸び俺の頭上にくす、という笑い声が降つてくる。なんだかそれが酷く懐かしく思えて顔を上げたのだが、エドワードは笑つていなかつた。そして、真顔で俺の顔を覗きこむ。「違うよ。それもあつたが、あれは……死ぬ前に、惚れた男との接吻というのはどんなものか知りたかつたんだ」

「あ、え？」

「でも、なんだか頭が真っ白になつてしまつて、思い出せないんだ。だから……もう一度教えてくれないか？」

「え……う、え、あ、ええ！？」

すつと伸びた彼女の手が頬に触れた瞬間、まるでそこから強い電流でも流れているように、俺は飛び跳ねて後ずさり、そのままどんどん尻餅をつく。だが、そんな俺を見たエドワードが腹を抱えて震えているのを見て、体中の血が顔と頭に集結した。

「か、か、からかったな！？」

「ぶつ……いや、すまない。君は相変わらず可愛いな」

笑いすぎて苦しそうに、エドワードがそんなことを言つてくる。

そんな言葉も、最近は聞かなかつた。だから俺にとつては不名誉な言葉なのに、嫌じやない。嫌じやないけど、やるせない。笑つてくれたのはいいけど、俺つてこんな笑わせ方しかできないんだろうか。「そんなに腐るな。別にからかつていない。君がいちいち可愛い反応をするだけだ」

「か、可愛いつて……俺は……ッ」

なんだかんだんイラライラしてきた。いや、彼女に苛立つてるわけじゃない。

可愛いなんて言われたら、やっぱ男として見られてないんじゃないってすっごい不安になつてしまふじゃないか。一緒にいたいって言ってくれても、当たり前のように傍にいてくれても、そんなこと言われたら気持ちが見えなくなつてしまう。

男として見てもらえず振られた過去が、俺には相当トラウマだつた。でも、あのときはそれも仕方ないって思えたけど。

でも、今はそれじゃ嫌だ。

ちゃんと男として見て欲しいし、頼つて欲しい。

だけど今の自分では無理だらうつてことも解りすぎていて。そんな自分への苛立ちが俺をたきつけて、咄嗟に両手で彼女の両腕を掴んでいた。

「からかつてないつてことは、ちつきの嘘じやないつてことだら」驚いたようにこちらを見る彼女を真っ直ぐに見つめ返す。変なところに火がついてしまったらしい。ちょっと後悔したけど、もう今更引けない。

「なら、するよ」

Hドワードは目を逸らさなかつた。驚いたよつて見えたのも一瞬のことだ、すぐに彼女も真顔に戻る。

「いいよ」

焦るわけでもうろたえる訳でもなく、静かに見つめ返してくる群青の瞳が点いた火を一瞬で消火する。途端にはつたりも利かなくなつてしまつて、うろたえたのは結局俺の方だった。

「ちょ……、ちょつと待つて」

「ああ。待つよ」

「お、俺、本気だからね？」

「……ああ」

笑いを堪えているのがバレバレな返事は、俺をさらに落胆させる。

そして楽しそうな彼女の声が、さりとせに追い打ちをかける。

「私がしようか？」

「い、いやー　だめ！」

悲鳴を上げる俺に、つこにエドワードは吹き出した。

なんだかヴァルグランدにいた頃を思い出す。こんな風にエドワードにからかわれて、ライオネルに睨まれて、すぐそこが戦場だなんて忘れそになるくらいの穏やかな日々。ライオネルはエドワードが俺を構う度気に入らなそうな顔をしていたけれど、エドワードが笑うと、それでもどこか嬉しそうだった。

「……エドワード」

「ん？」

「ライオネルは、あんたが笑つていれば幸せだと思つ。俺も同じだ。だから……、俺

「わかつてゐるよ。けど君はわかつてしない」

けどそんな俺の言葉をエドワードが遮る。何のことか分らず怯む俺に、エドワードが焦れたように言葉を継ぐ。

「私だつて、君には笑つていて欲しい。私の為に無理しているのは君の方じやないか」

「あ……」

豆鉄砲を食らつた鳩みたにぽかんとする俺を見て、エドワードがふうとため息をつく。

「……やつと氣付いた。

俺はこの世界に彼女を連れてきてしまつたことに、勝手に罪悪感を覚えて、勝手に焦つてたんだ。それが、きっと何より彼女を苦しめていたのにも気付けないで。そんな俺を頼れるわけもなかつた彼女に、頼られたくて無理してた。

なんて滑稽なんだろう。

気付いた途端、肩の力が抜けた気がした。そしたらなんか急に笑えてきて、ふつと笑い声が零れた。

そんな俺を見て、エドワードも笑つた。

あの悲しそうな笑顔じゃなくて。無理して強がった氣丈な笑顔で
もなくて。

その心底幸せそうな笑顔に触れたくて、腕を掴んでいた手を離す。

「……エレオノーラ」

「……はい」

頬に触れながら、自然に口をついた名前に、エドワードはそんな返事を返すと微笑んだまま目を閉じた。

俺はきっと、この笑顔を守つに行こう。ヘタレでも情けなくとも、はつたりでいいから笑つてこよ。エドワードが笑えるように。あいつが安心できるように。

新しい誓いと共に、俺はそっと彼女に顔を近づけた。

だがその先は、夕飯を告げる母さんの声にお約束のように阻まれた。

じあわせの口論 後編（後書き）

番外編のお話は以上で終了です。お付き合いで下りてありがとうございました。宜しければ一言頂けますと嬉しいです。

第一部 第十六話「約束」～ハードワード視点（前書き）

別視点からの本編シリーズです。リクエストを受けた話をリクエストのあつた視点で書いております。本編のネタバレ含・恋愛要素濃い目。

妙なことになつた。

そう思いつつも、煩わしいというような感情は沸かず、逆にこまごまとした用事で部屋を空けねばならぬことこそ煩わしかった。気まぐれに馬を走らせた先で、気まぐれに助けた少女は、少女ではなかつた上にこの世の人間でもないと言つ。何を馬鹿なことをと思いつつ、だが笑い飛ばすことができなかつた。

最初に違和感を感じたのは、女と間違えたことを詫びたとき。記憶がないと言つておきながら、『いつものこと』などという言い方をする。だけどボロを出すような局面ではなかつた筈だ。おそらく私が間違えたことを気に病まないよう咄嗟に言つたのだろうから、戸惑つた。私を欺こうとしているには、あまりに言つていることなどがちぐはぐだ。

あれこれ思案していた私は、だんだんと部屋へ向かう足取りが早くなつていて、氣付くのが遅れたが、氣付いてしまえば苦笑するしかなかつた。

まさか、彼は本当に魔女で、いや魔「女」ではなくともフレンシアからの刺客かなにかで、私は本当に籠絡されているのだろうか。……或いはそうかもしれない。

全てが彼の演技で、いつか私に死をもたらすとしても、それならそれでいいと思えてしまつ。その思いは、彼が言葉を紡ぐたびに大きくなる。

私が言えず胸に秘めたことを、次々と彼が口にするたび、これが全て嘘でもまやかしでもいいと思えるほど満たされた。

だから怖い。

彼に言われずとも、この世界に生きる者はまるで違う目をした

彼は、

突然ふつと、消えてしまひそうで。

そんな焦燥が、自分を部屋へと急がせていた。だが、開け放つた扉の向こうに彼の姿を確認したときに得たのは安堵だけではなく、同時に苦みのようなものも胸を侵食していく。その理由は、彼が手にしていたものにあった。

「何をしているんだ」

私の剣を手に取っていた咲良を見て、思わず咎めるような声を上げてしまう。

「あ、勝手に触つてごめん……」

違う。咎めたのは、私の私物を勝手に触つたからではない。

それを解つていらない咲良の手から剣をひつたくる。

「そうじやない。君は剣を持つ必要はないんだ。私が護ると言つただろ？」

この剣はルゼリア皇帝から賜つたものだが、正直なところ壊れようが折れようがどうでもいい。異端者である私に名誉などこの言葉はあまりに意味がない。

ただ、ルゼリアにも力を認められたということは事実としてある。それなのに、私が全力を賭して守るといつても受け入れてくれない咲良にはときには立ちを禁じえなかつた。一体何が不満なのかと言外に含んで見下ろせば、咲良は私から目を背けて、空になつた手を見つめながら言い難そうに呴いた。

「ええと……なんかそれって物凄くヒモっぽくて悲しいかなつて……」

「ヒモ？」

「ええつと……、女人に依存するヘタレな男？」

「それが何か悪いのか？」

男だ女だなどという概念は、どちらでもない私からすればまた一等無意味なことだ。

少女だと思いこんでいたから驚きはしたが、男であつたからといって何か私の中で変わったわけではない。咲良は愛らしい容姿で純な言葉を吐き、今にも消えそうなほど儂くかよわい。なのに、私に

迷惑をかけまいとする様が健気で、保護欲をかきたてる。それで思わず髪を撫でようと手を伸ばしかけたが、彼が口にした言葉によつてその手は止まってしまった。

「……でもさ、Hドワード。もし戦場に出るにになつたら、俺足手まといにしかならないよ。それなのに英雄の右腕なんて、誰も信じないんじやないかな」

「私は英雄などではない。誰がそんなことを言つたんだ」

とても嫌いな単語に、唐突に現実に引き戻される。酷く興ざめしてしまつたが、咲良が困つているのを見ていたら、結局放つておくことができなくなつた。

「先日大規模な攻防戦を終えたばかりだ。当分私が前線に出るようなことはないだろ?」

「でも……」

「……ああ、そうだな。丸腰というのは確かに不自然か……」

やつと、彼が何を言いたいかが分かつた。

私の腹心が丸腰というのは確かに妙だ。いや、そんなことは元からわかつてはいた。それでも、私は咲良に剣を持つて欲しくなかつた。戦いが嫌いだという彼の言葉に安らぎを感じていたかつたから、そななものと彼を結びつけたくないといつ、要するに単なる私の我儘だ。

だけど、それでも傍に置くなら我儘を言つてはいる場合ではない。それに、やつと氣付いたのだつた。

「ここにあるのは私が賜つたものだから、武器庫から見繕つてこよう」

「あ、いいよ。何でもやつてもらつてぱっかりで悪いし……、自分で見たいし、自分で行く

「ならば案内する。ついておいで」

自分を納得させるため、それ以上の思考を放棄して部屋を出る。後ろをついてくる咲良の気配を感じながら、重い足を武器庫へ向ける。

「……エドワードって忙しい人なんぢゃないの？」

「そうでもないさ」

ふとそんな声が背中に掛かつて、私は自嘲気味に返事をした。

「訓練は部下に一任しているし、指揮はライがとつていて。私でなくば駄目なことなどそうはないんだ。……そんな私が英雄だというなら、随分怠惰な英雄もあつたものだろ？」

そんな弱氣な発言、一体今まで誰にできただろう。私を信じ、付き従い、命を懸ける者たちの為に、私は例え偽りでも英雄でなければならなかつた。だけど、咲良がヴァルグランドの人間でないといつたらその必要はない。だから、傍にいて欲しいと願つてしまふ。怠惰なだけでなく、私は酷く自分勝手だ。

それから咲良は何も言わなかつたけれど、そつと振り返つてみると、肩越しに見えた彼の顔はどこか釈然としないようで、こんな弱味を見せてなお私を英雄たる人物だと思つてくれていることが、今は嬉しく感じた。

そのうちやがて目的の場所に辿りつき、その扉を押しあける。私は自らは滅多に来ない場所だが、冷えたここでの空気は嫌いではない。

「……どれでもいいの？」

「ああ。好きなものを選ぶといい」

一般的に兵に支給している剣から、行商人に押し付けられたものまで何でも押し込まれていて、それだけに一本くらい減つたところで誰も気付きはしないだろう。本当は、どんな小さな武器であれ持たせたくないのが本音だが、そういうわけにはいかないと先ほど悟つたばかりであるから、投げやりに言つて彼に灯りを手渡す。そして、興味深そうにあれこれ手を取る彼をぼんやり眺めていたら、ふとその姿が闇に沈んだ。同時に、物凄い音が耳をつんざく。

「咲良！？」

その音に驚いて、思わず私は暗闇に踊り出していた。

……そんな迂闊なこと、普段なら絶対にしない。なのにどうしたことだらう。気持ちがふわふわして、まるで酒にでも酔つたように

高ぶる気持ちが冷静な思考を奪う。

「大丈夫、口ケただけだよ！ 危ないから

そんな声を遠くに聞きながら。

」

そして、冷静を欠いた自分を、どこかで心地よく思いながら。ふわりと体が浮く。

こんなに思い切り転んだのは、子供の頃以来だ。思わず笑い出しそうになるがそれを止めたのは、ぐえ、という苦悶の声だった。

「す、済まん。暗くて足元が覚束なかつた」

どうやら派手に咲良を押し潰してしまつたらしく、下敷きにしてしまつた彼に慌てて詫びる。

石の床よりは柔らかいが、意外に筋肉質な感触に、やはり男なのだと改めて思い知った。裸を見ておいてなんだが、やはり服を着ていると少女にしか見えないので。見間違いではなかつたかと思つてしまつほど。

だけどその感触も、転がつた灯りに照らし出された彼の慌てた顔も、それを否定する。

それにも慌てすぎだ。十人が見て十人が慌てていると断言するほど、見事に彼は混乱していた。真つ赤になつて訳のわからないことを呻いている彼を見て、なんだか新しい感情が生まれてしまった。

可愛い。

レインホールト

これでは、レインホールト婚約者が私のことを可愛げないというのも無理はない。こんなに可愛らしい反応、女であつた頃の私でも到底無理だ。

このままもつと近づいてみたら、どんな反応をするだろう。それを確かめてみたい欲求をすんでのところで耐えられたのは、ふと目にした覚えのない剣が視界に入つてそれに興味を奪われたからであった。

「 変わつた剣だな。片方しか刃がない」

欠陥品だろうか？ こんな剣が武器庫にあるなど知らなかつた。

それは本当にただの呴きだつたのだが、意外にもそれが咲良の興味

を引いたよつて、焦点の定まつていなかつた目がその剣一点に注がれてゐる。

「エドワード

「ん? 「

「俺、これがいい。これにする」

そうして私を呼んだ彼は、迷いのない声でそう告げた。
剣は人を選ぶ。誰かがそう言ってたのを不意に思い出してしまつほど、その剣は酷く彼の手に馴染んでいた。ざくりと、肌が粟立つくらいに。

どんなに酷い戦場に出よつとも感じる「このなくなつていた恐怖が、今私を襲つていた。人」とのようになら、そうか、と答えるので精いっぱいだった。

この剣を振るう咲良が血に塗れるところを想像しそうになつてしまつて、慌てて頭を振つてそれを追いだす。

それだけは嫌だ。

主よ、もしもあなたが本当に存在するというなら 戰うことを厭う者が血に塗れるなど、私だけでもう充分ではないか。

声にならぬ呟きとともに、私は咄嗟に剣を掴む咲良の手を握り締めていた。

「咲良。ひとつだけ約束してくれ

「え?

既に汚れきつている私は、どのような道が待ち受けようが覚悟している。

だけど、咲良だけは。

間違つてると、自分を押し殺していた私の心を救つてくれた彼だけは、綺麗なままで守り抜きたい。だから私は、この世界ではあまりに難しい約束を彼に強要する。

「……その剣で、誰も傷つけないで。今ままの咲良でいて欲しいこの世界に在つても彼にその約束を守らせることを、自分に誓いながら。

第一部 第十九話 招かれたる者へエドワード視点

突然の婚約者の来訪に、私は動揺を隠せないでいた。

婚約者といつても、表沙汰にはなっておらず、私の家と相手の家で秘密裏に約束されただけのことではある。それもその筈で、エドワードとして剣を振るう私が嫁ぐことなど出来るわけがない。だからといって、いくら男だと言い張つても現実に男の体を持たぬ私は、どこぞの姫君を娶るわけにもいかない。対外的にはそうなるだろうが、それではそのどこぞの姫君があまりに憐れだ。

どのみち、長きに渡つてルゼリアを欺くことは、かえつてヴァルグランドにとってリスクが高い。だから戦況が落ちついたところで、私は自分で自分の始末をつけるつもりだつた。

今私の願いは、戦場で死にたい、ただそれだけだ。そんな私は、最早女性には戻れないのだろう。だからもう決心はついていた。筈なのに。

なのに、なぜ今更、こんなに心が揺らぐのだろう。

「元気そうで何よりだ、エレオノーラ」

「……エドワードだ。何度も言わせるな」

「久しぶりに会つたというのに随分な言い草だ」

その名を呼ばると胸がざわつく。その名と共に棄て去つた筈の迷いまだが、一緒に姿を見せそうになつてしまつ。

だが何度も言つても、レインハルトは決して私をそう呼ぶことをやめない。

例え私が剣を棄てて女に戻つても、エレオノーラに戻れるわけではないことくらい、レインハルトだって解つてているだろに。

「お前が何度もを変えようが、誰になろうが何をしようが、オレにとつてお前がエレオノーラであることは決して変わらん。お前が棄てるなら捨う。忘れるなら思いだせる。何度もな」

心を読んだように、レインハルトはそう呟つと、私の髪に手を差

し入れた。

心を読めるなら、どうして受け入れてはくれないのだろうか。そうして寄り添つてくれるなら、せめてその眼差しを受け止めるくらいは私にもできたらう。だが私はその熱のこもった瞳から、逃げるよに目を逸らした。

……咲良なら。私のことなど何も知らないけれど、私の考えていることなどなにも解らないのだろうけれど、それでもいつも私の心をそっと撫でて癒してくれる。

だから、ただ傍にいるだけで、見ているだけで安らげるのに。思わずそんな風に思つてしまつて、そしてそんな自分に愕然とした。

「これでは、まるで

「エレオノーラ」

鋭い声で呼ばれ、心臓が跳ね上がる。それを鎮めるように、私は自分の体を抱いた。……こんな気持ちだけは、読まれる訳にはいかない。静かに息を吐き、心を落ちつける。そうして何事もなかつかのようにレインハルトを見上げると、強張つたように見えた彼の表情は、すぐに解けた。

いつものように微笑んで、私の髪を一束手に取り、口付ける。

貴婦人達なら黄色い悲鳴でも上げるのだろうが、私の口からは何も零れない。けれどその髪を搔き上げられるとまた胸がざわついた。

「また、傷が増えたな」

髪で隠れていた首筋の傷を見つけられて、咄嗟にそれを手で覆う。見られて困るものでもないし、見られたくない訳でもない。ただ、傷ついてゆく自分の体を知るのが、穢れいくようで辛かった。だけどそういう逃げを、レインハルトはいつも許してはくれない。手首を掴まれ、傷を覆つていた手は力尽くで引きはがされる。

「そんなに傷つくのが嫌なら、戦などやめてさっさとオレのものになってしまえばいい」

首筋に熱い吐息が触れる。何か含んだような視線とぶつかり、だ

がやはり私はそこから目を逸らす。

「……何か用事があつて来たのではないのか」

さりげなく身を引いてそう問いかけるが答えはない。彼へと向き直り、無言で促すと、不服そうな目をしながらもレインハルトは口を開いた。

「国王陛下からの伝言だ。早々にノイシスを落として帰還せよとな
そうして彼が告げた父上からの言伝は、予想と違わぬものだつた。
指揮を執るライオネルが慎重に行きたいというので任せているが、
それにしたつて時間をかけ過ぎだとは私も思つて了一ことだ。

「らしくないな、エレオノーラ。あんな小さな簪を落とすのにどれ
だけ時間をかける気だ」

「リティアース軍はもう虫の息だ。焦つてこちらから仕掛け被審
を出すより、じわじわといたぶる方が手間も被害もない」

「つぐづく恐ろしい女だ、お前は。まあ構わんさ。好きなだけ戦に
興じていればいい。お前に傷が増えれば増えるほど、お前を顧みる
男はいなくなる。オレにとつてはその方が望ましい」

ほほ言い訳だつたが、さらりと返した私に、レインハルトはそん
な言葉を投げつけてきた。今更それに傷つくほど私は纖細ではない
筈なのに、心のどこかが刺されたように痛むのは何故だろう。
だがふと間近に感じた気配に、思考が奪われる。

「レインハルト」

制止の意味をこめて名を呼ぶが、聞き入れて貰えないのもまた分
かつっていたことだつた。力で勝てない私は、それでもその手から逃
れようと後ずさるが、ソファに押し倒された時点でそれすら誘導だ
つたのだと知る。

最後の抵抗に顔を背けても、顎を掴まれて引き戻される。

「今は、やめないか。そんな場合ではないだろ？」

「今がそんな場合でないなど笑わせる。ではお前はオレに、半年振
りに会つた自分の女に何もせずに帰れとでも言つのか」

正論だとは、思う。恋人との逢瀬に、こんなに淡々としている自

分の方が少しおかしいのだと。

異端者である私に残された道は、裁きを受けて死罪となるか、軍人として戦場で果てるか、二つに一つしかない。そんな私に、女としての幸せを与えてくれようと言つのだ。それを不満に思うなど……どうかしている。

抵抗を諦めた私を見てレインハルトが満足げに笑い、それを最後に私は何を見るのも放棄して目を伏せた。

でも、それが間違いだった。

目を伏せたら浮かんでしまう。無邪気な笑顔が。拗ねたように怒った横顔が。気持ち良さそうな寝顔が。それは全て、同じ人のものだつた。

「あ……」

衣服がほどかれて、はつとした。すぐ隣の部屋はライと……咲良がいる。あの馬鹿弟は、いくら言つても入るときにノックをしないのだ。

「……待ってくれ。せめて、寝室で……」

「待てん」

再び抵抗を試みる私に、レインハルトは気分を害したように短く答えた。

だけど今度は退けなかつた。こんな姿だけは見られたくない。

……嫌われたくなかった。

私の心は、戦と血で凍つてしまつたのだと思つていた。人を愛せないのだと、だからレインハルトを受け入れられないのだと。違つた。

思い描いていたものとは少し違つたけれど、昔憧れた、あの感情をきつと今の私は……知つている。

「やめる。離せ！」

気付いたら、叫んでいた。その声に彼が怯んだ一瞬の隙をついて、その手を抜け出す。隣の部屋で物音がして気配が動き、慌てて軍服を羽織つたところで再びレインハルトに腕を取られる。部屋のドア

が開け放たれたのは、丁度それを振り払おうとした瞬間だった。

「どうした、エド」

飛び込んできたライが、私の姿を見て絶句する。その後ろに咲良の姿も見えて、私は今一度レインハルトの腕を振り払うと、羽織つただけの軍服を搔き合わせた。こんな醜態、弟にも見られたくはなかつたが、事情を知らないだらう咲良にはもつと見られたくなかった。「無粋な真似をするね、ライオネル」

「……貴方こそ妙な真似をしないでもらおうか。いくら婚約者といえど祝言も前にこのような不貞を働くなど、エンズレイの名も地に墮ちたものだな」

「ハーシュエン家の方は躊がなつていないようだ。義兄に向つて随分な口の利き方をする」

レインハルトとライが、冷え切つた言葉を投げ合つ。だが本当に興ざめしているレインハルトに対し、ライは明らかに頭に血が上つていた。本当なら私が止めなければいけないのに、動けないし声も出なかつた。……咲良が、どんな顔をしているのか、それさえ確かめることができなかつた。

「僕は貴方を義兄などと認めた覚えはない！」

「ならばこんな曰くつきで傷だらけの女、他に誰が娶ると？」

ついに激昂したライに、レインハルトが冷たく言い放つ。ライに向かつて言つていながら、彼の目は私の方を向いていた。単なる挑発だつただろうし、既に何度も浴びせられている言葉に今更私が感じることは何もないけれど、挑発をもろに受けてしまつたライの顔が傍目にわかるほど強張る。それで、私はやむなく仲裁に入ることにした。

だけど、実際に止めなければいけなかつたのはライの方ではなかつた。

ふと、気配が動く。振り向いた先で、咲良が固めた拳を振りかぶつていた。今まで見たこともないような、憤怒の形相で。

「咲良！」

そんな咲良はまるで別人のようで、一瞬呆けてしまつたがそんな場合じやない。だけど咄嗟にできたのは叫ぶことだけだつた。結果、止まらなかつた咲良の拳を、レインハルトが片手で受ける。

……敵う相手じやない。私ですら、レインハルトが相手では五分五分だ。そして彼は気分を害した相手に容赦はしない。それが、赤い瞳を持つものなら尚。例え咲良が何もしていなくても、それだけでレインハルトはきつと。

「赤い瞳。魔女など飼つてどうするつもりだい、エレオノーラ？」涼やかな声とは対照的な殺氣が、私の考えを肯定する。その瞬間、迷わず私は服から手を離して叫んでいた。

「やめろ、レインハルト！」

羞恥心や自分の立場など、どうでも良い。

今まで守ってきたもの全てが、些細なことにしか思えなかつた。咲良がいなくなつてしまつことに比べたら。

「咲良は魔女ではない。彼に手を出すなら、私が相手だ」レインハルトが、珍しく戸惑つたように私を見る。きっと私の気が触れたのだとでも思つてゐるのだろう。そしてそれは間違いじゃない。今の私に咲良より大事なものはなくて、私自身がそう感じる自分に戸惑つているのだから。

膠着はしばし続いたが、ややあつてレインハルトは咲良から手を離した。

「わかつた、帰るよ。そもそも、言伝を持つてきただけだしね」

両手を上げてそう言ったレインハルトにもう戦意は感じられなかつたが、咲良への敵意は消えていなかつた。それを感じていた私は、彼が退室するまで剣を手放すことはできなかつたが。

その気配が完全に消えてしまつて、ようやく剣から手を離しても、険呑な空気が消えることはなかつた。

「……何されたんだよ」

「君には関係ない」

そんなことを問いかける咲良に、私が返した言葉も声も酷く冷た

いもので、自分自身そのことに驚いていた。

本当は嬉しかったのに。

戦うことあんなに臆病だった咲良が、自分の身も顧みず私のために怒ってくれたことが、……凄く嬉しかったのに。

だが、だからこそ彼の顔を見ることができなかつた。いくら彼が純朴だとしても、この状況で察しがつかないほど子供ではない筈だ。責められても優しくされても辛い。突き離すしかできなかつた。「……エドワード。レインハルトからの言伝とは何だつたんだ？」

だから、間に入つたライの声が、この上なく有難かつた。

「ノイシスを落として帰還するようにと、父上が

「やはりか……」

そう言つとこりを見ると、ライも時間をかけ過ぎてている自覚はあつたのだろう。

「どうするつもりだ？」

それでもそんな問い合わせをしてくるといふことは、やはりライが時間をかけていたのは私の為、なんだろうか。見慣れた弟の鋭いだが優しい瞳を見ていると、その答はもう解りきつていた。

熱くなつていた頭と心が落ちついていく。自分の気持ちを偽れなくなつているのも事実だが、ライは私にとつて大事な可愛い弟で、それもまた事実だ。

「一晩考えさせてくれ。少し、一人になりたい」

ライは何か言いたげにしていたが、私の様子で察してくれたのだろう。咲良を連れて踵を返す。

そのことに安堵していた筈なのに、だけどそうではない部分もあつた。

一人になりたかったのは、一人になりたくなかったから。泣いて縋つてしまいたいという気持ちを殺したかったから。まるでそれを見透かしたように、偽りきれない私の視線を咲良が拾う。

「エー

呼ばれたら、もう強がれなかつたかもしれない。

だがその声は、強張った表情のライが再び部屋に戻ってきたことによつて搔き消された。

「エドワード、前線が突破された。フレンシア軍がこちらに向けて進軍している」

告げられた言葉に、唐突に現実に引き戻される。

「フレンシアからの布告だ。『リティアースを取り返しに行く』

奇妙な布告は、一つの可能性を嫌でも私に突きつける。含みのあるライの声は、彼も同じことを考えていることを示している。でも、そんなことは関係ない。やつと、ざわついていた心が穏やかになった。

そう。ヴァルグランドの為に戦場で剣を振るつことが私の使命。私は、ヴァルグランドの英雄黒太子だ。その名にかけて、戦うだけだ。

例え、咲良が何者でも。

第一部 第十一話 想い、すれ違い～ハードード視点

「……怪我、大丈夫？」

「そぼそと、唸るような声が聞こえる。

注意しなければ何を言っているかわからないような声を、一字一句漏らさず聞きとつてしまつてから、私は聞こえないふりをした。見なくても、動搖しているのが伝わってくる。案の定、なかなか次の言葉を継げない彼に、私は助け舟を出してやることも、そちらを向いてやることさえもしなかつた。そんな私の態度を、咲良はきっと、怒っていると思うに違いない。

「ええと……やっぱり、怒つてる……よな」

相変わらずそぼそとはつきりしない声を、やはり私は一字一句違はず聞きとつて、ため息が零れた。

いや、実際怒っていた。

だけどその理由は、多分咲良が思つているものとは違う。

咲良は多分、フレンシアの人間であることを黙つていたことを私が裏切りだと呟つとでも思つているのだろう。

だが、書状に咲良の名を見つけたとき私に湧いた感情は、怒りではなかつた。

怒りでも恨みでも、ましてや憎しみでもなかつた。あらゆる負の感情を挙げ連ねたところで当てはまりはしないだろう。

だが、嬉しいといふのともまた違つた。結局、どんな言葉でも形容できない感情だった。

そんな感情で手が震えたのを咲良は知らない。

そのせいで返事を書くのに酷く苦労したのを知らない。

あのそつけない文面を、どれほど思いで書いたのか、ちつとも知りはしないのだろう。

なのに咲良は、私がいなくとも、私が守らなくとも、平氣そうだから。

恨み事のひとつも言いたくなる。

「当たり前だ。君が待つていろというから待つていてみれば、フレンシア軍から君の名前で書状が届くわ、来てみれば可愛らしい娘と楽しげに話しているわ。これで怒らすして何で怒れと？」

「い、ごめん！ 今まで黙つ……て、え？」

ほら、やつぱりだ。

咲良がなにか隠していることは薄々気づいていた。というか、咲良はなんでも顔に出過ぎる。そんな彼が、私を陥れようとして黙っていることなどできるわけがない。そう思つて触れずにいただけだ。今だつて、狼狽しきつているのが見てわかる。だが彼のそんな様が可愛くて、許してしまいそうになるのが悔しいので、さつさと話題を変えることにした。このあたりが私が可愛げないと言われる所以だろ？

「それで、私に話とは？」

「ちょっと……、ちょっと待つてよ。それだけ？ 僕、助けてもらつといで、何も言えなかつたのに」

そんな私の言葉に、咲良はますますうろえたようだつた。むしろ私より咲良の方が、隠していた事実に胸を痛めていたのではないだろうか。

「見ぐびるな。君が何かを隠しているのは知つていた。……言っただろ？、君が魔女でも構わなかつた。助けたのも守つたのも私の勝手だ」

今更だが、せめて咲良が罪悪感を持たないようになつかりと云えておく。

全部過去形にしたのは、守らせてくれない咲良へのちょっとした当つけだったが、それに気付いたかどうかは分からない。頃、垂れるばかりの様子を見るに、多分気付いていないだろ？

鈍いわけではないと思うが、咲良は自分に自信がなさざるのだ。確かに戦えば私が勝つだろうが、戦ばかりの私と戦つたことのない咲良では、そうなるのは至極当然のことだ。咲良だつて決して筋

は悪くない。私の部下なら期待して育てたところだ。けれど彼の世界では戦う必要がないのだから、その力が延びないのは当たり前だし、延ばしてやるつもりもない。

それだけのことで、戦しかできない私に比べ、咲良はそれ以外のものなら何でも持っているように私には見える。

それを貰う代わり、私は私にできることで返したいから、守ると言っているのに。

でもそれを言つてもきっと、咲良は納得してくれないのでうなづかれる。

「……話、だけど」

訪れた沈黙を、そんな切り出しで咲良が破る。

「ノイシスへの進軍を待つて欲しい。俺はその間にフレンシア国王を説得して、戦争を止めてもらおうと思つてる」

「なんだと？」

そうして彼が口にしたのは、予想もしていなかつたことだった。「こんな戦争、もう終わりにしてみや。」したこと何百年も続けてるなんて馬鹿げてるよ」「

私が心の奥底で思い続けながらも、決して言葉にできなかつたことを、あっさりと彼は言つてのける。私が思い続けながらも、どうすることもできなかつたことを。

いつもはそれが心地よいのに、このときばかりは苛立つてしまつた。

一つの国を数百年に渡つて縛つた憎しみを、今更誰かにどうにかできるわけがない。そんな途方もないことの為に

「君はそんなことの為に、私の元を出て行つたのか？」

堪え切れずに私は口を開いた。自分で思つたよりずっと冷たい声が出た。

今この瞬間こそ、私は怒つていたかも知れない。

「そんなことって

「いや、済まぬ。言い方が悪かった。……そんなことが本当にでき

るとでも思つてゐるのか、君は

さすがにきつと聞こ過ぎた自覚はあつたので詫びはしたが、氣は

おさまらなかつた。

「元の世界に帰る為と。彼を戦から離す為ならと、その為であれば
こそ、引き止めなかつたのに。」

出来る筈もないことの為に戦いに身を投じるといつなら、力尽く
でも行かせなかつた。

抗議の意をこめて咲良を見据えると、視線が逸れる。

「君や私が何かしたところで、この根の深い憎しみ合ひは、終わら
ぬ」

でも、責めたいわけではないのに。

結局、あのときも、今も、私は肝心な一言が言えないだけなのだ。
これでは萎縮させるだけだと反省しかけたが、意外にも咲良は私
に食らいついてきた。

「そうかもしれない。でも何もしなかつたら確実に何にもならない。
俺は、ただ流されて死ぬなら、せめて足搔きたいと思つ

何故、そこでそつなるんだ。私を信用していないのか、悔つてい
るのか。確かに負傷はしたが、約束通りにフレンシア軍は押しとど
めた。なのに何故、死ぬ前提で話をするのか理解できない。

「だから、私が守ると言つたんだ。傍にいれば死なせたりなど
しない」

苛立ちを隠さず叫ぶと、同じく苛立つたよう、さつと咲良
が私を睨んでくる。

「今までだよ？」

そう嘔みついてくる咲良に何も答えられないのは、答えを持ち合
わせないからじゃない。咲良が私に対して声を荒げたことが今まで
なかつたから。戸惑う私に、だが畳みかけるよつて咲良の怒号は続
く。

「いつまでも傍にいられるわけじゃなかつただろ。それともあのま
ま傍について、黙つてあんたが戦場に行って怪我するのを見て、その

後は他の男の物になるのも黙つて見てろつて？〔冗談じゃない。俺はあなたの飼い犬じゃないんだ！〕

その、言葉のひとつひとつが。

刃となつて体中に突き刺さるようだつた。それは直接斬られるよりもずっと痛くて、立つてていることさえ苦痛だつた。

咲良の言つ通りだ。いつまでも私が守れるわけじやなかつた。なのに、傍にいられることに甘えていた。咲良が去つた後、寂しさに気が狂いそうで、出て行つたことを心のどこかで責め続けていた。でも、私が咲良に傍にして欲しいと願つて、そして咲良も同じことを私に望んでくれたとしても、私にはそれを叶えることはできなかつた。

せめて許される間だけ。それで私は満たされても、咲良が満たされることは覚悟だ。

私は、自分のことしか考えていなかつたのだ。怒鳴られてやつと、そのことに気付いた。

「ごめん、今のは忘れて。話を戻そう」

愕然とする私を慮つてくれたのか、咲良は詫びてくれたけれど。彼が私を責めるつもりなどなかつたことは最初から分かっている。むしろその逆だつたから、痛かつた。

戦より婚約者よりも咲良を選べば傍にいてくれるというなら、あれは責め句ではなく酷く遠まわしな告白だ。

……逃げられるなら逃げたい。咲良の傍にずっといたい。だがそれでも、私には応えることができなかつた。

結局私は、国を、父上を、レインハルトを裏切ることはできない。私は私を育んだこの国を愛しているし、不器用ながらも父上が私を愛してくれているのを知つてゐるし、異端者である私を一途に想い続けてくれるレインハルトに感謝しているから。

そう思う一方で、ヴァルグランدに縛られるこの身が酷く煩わしかつた。女を棄ててしまつたことも、この手が血塗れなことも、初めて悲しいと思つた。

どの道、そんな私は咲良に相応しくはない。私だけでなく、争うばかりのこの世界も。

咲良はこんなところに居てはいけない人だ。その思いが、すっかり乾いてしまった私の口を動かした。

「……君は、元の世界に帰りたいのではなかつたのか？　この世界の争いことなど君には関係ないだろ？　どうしてそんなことに首を突つ込んだりするのだ」

それは咲良の欲しているような答ではなかつただろう。やう言つた私に、咲良は不満気にしならがらも落ちついた声で答える。

「帰りたいよ。だから戦争を終わらせる。俺は、リディアーヌの遺志を継ぐためにこの世界に呼ばれたんだ。戦争が終われば彼女から解放される筈だ」

「ならばこんなまぢゅうじこじことをせずとも、私の首を獲つた方が早いではないか。その機会は君ならいくらでもあつた筈だ。何故そうしなかつた？」

咲良は、私を傷つけずに戦を終わらせようとしているのだ。分かつていて、敢えてそんな言い方を選ぶ。だが言つたことに嘘はない。歩み寄るには時間がかかるが、どちらかが勝利すれば戦など今すぐにでも終わる。さすがに今ここで首を渡すことはできないが、せめて咲良が私と戦う意志を持つてくれればと、そう思つた。だが。

「つ、いい加減にしろよ！？　馬鹿なこと、を

激昂する声が、途中で消えた。

そのまま、まるで糸が切れたように、咲良の体が大きく傾ぐ。

「咲良！？」

驚いて、咄嗟に手を伸ばした。咲良の身に何が起つたのかわからぬ今、そんな場合ではないのに触れた指先が熱くて、一瞬ぶつかった視線が愛しくて、思わず抱き締めてしまいそうになる。

でも、かすれた警告がそれも止める。

「駄目だ、エドワード、俺から、離れ

理解するより前に体が動いていた。それは理由があつてのことではなく、何度も潜った死線の中で身に着いた、いわば勘。咄嗟に手を離して体を引く。凍るような殺気を感じたのは、その後だった。もう少しそれに気付くのが早かつたところで、それを咲良と繋げることを刹那のうちにできなかつただろう。

「……よしやく会えましたね、黒の魔女」

やつ轟かれてやつとのことで、私は状況を理解したのだから。

吐き出す息が白く濁る。

ヴァルグランド全土に置いてあまり温暖な地域はないが、この辺り フレンシアとの国境付近はその中でも冷え込む方だ。といつても命に関わるほどでもないから、私も兵たちも慣れたものだが、咲良には少しここの中の気候は厳しいらしい。

「ここって、寒いよね……。いつもこうなの？」

自分の体を抱きながら、寒そうに咲良が私にそう訊いてくる。

「まあ、近頃は少し冷え込むが。大体いつもこんなものだ」

答えると、彼は残念そうに頑垂れた。私は咲良の元いた世界を知らないが、世界が違うのだから環境だって違うだろう。ここで生きている私達にとっては大したことなくとも、いきなり放りこまれたであろう咲良には命に関わるかもしれない。そういうえば先日も熱を出したばかりだ。私に遠慮して苦痛を我慢しているのではと、急に不安になった。

「寒いのか？」

「少しね。ストーブとかあつたら嬉しいんだけど

「すとーぶ？」

「うん、ないよね、わかつてた」

心配して問い合わせると、聞いたことのない言葉を返してくれる。それがどんなものなのか私には想像もつかないが、とりあえず返ってくる声の調子からするに、体調が悪いわけではなさそうでほっとする。

それでも、いつ体調を崩すかはわからない。何しろ咲良は線が細いし色も白いし、見るからにか弱そうだ。ライも細いと思っていたが、身長もない分、咲良は余計危うく見える。まあその小さいところが可愛いのだが。

「この鎧は大きい方だが、所詮は攻防用の鎧だからな……、確かに

過(ご)しあやすくはない。不便をかけて済まん

「いいよ、我慢できないほどじゃないし」

温めてやりたいけれど、そう設備や物資があるわけでもない。兵達でさえ毛布一枚が闇の山だ。誰であれ特別扱いというわけにもいかない。できることと言つたら

「なんなら、今晚も一緒に寝るか?」

「いや、いいです!」

「冗談混じりに言つてみると、途端に咲良が悲鳴じみた声を上げる。その照れた様子が愛らしいので、からかうのをやめられない。だがからかい混じりではあつたが、実際に一緒に寝てくれるのならそれはそれで大歓迎だ。昔よくライに添い寝してやつたことを思い出して懐かしい。あのときのライみたいに、咲良は小さくて可愛くて温かくて、ぎゅっとしていると落ち着くのである。

咲良は私とひとつしか歳が違わないと言い張るが、未だにそれが信じられない。「下のライよりも、咲良はさらに下に見える。十六というのが本当だとしたら、一体どれだけ童顔なのか。羨ましいや、ともかく、最初会ったときは下の妹と同じくらいだと思つていたので、どう上にみてもせいぜい十一歳くらいにしか見えない。ともかく恨みがましい視線を感じたので、私はそちらに向かって向き直つた。

「いや済まん。可愛いからついつい」

「……それ、フォローになつてると思つてる?」

「もう怒るな。……寒いなら暖を取る方法はあるぞ」

すっかり腐つてしまつた咲良に、だが私は良案を思いついて踵を返した。他にも暖をとる方法はある。

「呑めば温まる」

本来軍に嗜好品は厳禁だが、冷え込むときに暖をとる手段として酒の備蓄はある。それを手に取つて咲良に差し出すと、彼は慌てたよつと両手を振つた。

「いやいや。俺未成年だし」

彼の言葉に首を傾げる。確かに十六と言つていたと思うのだが、やはりあれは嘘だったのだろうか。それとも、成人の基準がこことは違うのだろうか。

「確かに咲良は、十六と言つていなかつたか？」

「う、うん……」

「ヴァルグランドでは十五で成人だ。それに、酒で暖を取るのに歳は関係ないだろ？」

実際のところはわからないが、咲良の嘘は分かりやすい。十六と言つたときの咲良が嘘をついているように見えなかつたし、どちらにしろ酒で寒さを凌いだからといって咎められることはない。そう言つても、咲良は首を縦には振らない。

「でもやっぱり酒はやめとくよ……。俺、弱いんだ」

何かと思えばそんなことか。

「だが、寒いのだろ？」

言いつつ、先に私が一口飲んでみせる。

正直、私は酒に酔つたことがないから強い弱いの判別はつかぬのだが、暖をとる為に支給されている酒がそう強い筈もない。と、思う。

「そう強い酒ではない。いくら弱くとも一杯くらいでは酔わぬ」

「う……」

それでもまだ頷かない咲良を見ていたら、悪戯心が沸き起つった。
「それとも、やはり一緒に寝るか？」

「いただきます」

顔を近づけてそう言つと、即答して私からカップを取る。

期待通りの反応に思わず笑うと、彼はそんな私をやはり恨みがましそうに見たが、その後は覚悟を決めたように一気に酒を煽る。無理して一気に飲まなくてもいいのに、そういうところがなんとも可愛い。

「な、大したことないだろ？ 温かくなつたか？」

そんなわけで上機嫌で笑いかけるが、咲良が答えることも、笑つ

てくれることもなかつた。

たつた一杯しか飲んでいない筈なのに、顔が真っ赤で、目なんて据わつっている。

そんな表情は、彼の幼さを綺麗に搔き消していく。

呆然とする私の前で、荒い息を吐きながら、咲良が上着を脱ぎ捨てる。

「さく」

そうして突然掴みかかられて、声は途中で途切れた。何が起こったのかわからぬままに、足を取られてバランスを崩す。この私がだ。

あつさりと転倒させられて背中からソファに落ちる。

そんな事実も状況も、まだ飲み込めずにいた。だけどきっと、逆らおうと思つたらできた。腕を振り払うことだつて簡単にできた筈だ。だけど、体が全然動かない。

違う。動かないんじゃない。勿論、動けないのでもない。

「……まださむいから、」

別人のように大人びた『男』の顔で、私を組み敷いて、咲良が呂律の回らぬ舌を動かす。

「あつためて」

瞬間、体中が熱くなる。

顔を近づけられても、背けることもできなかつた。

それは、驚いたからでもある。でもそれは一番の理由じゃない。むしろ、その一番の理由に、何より驚いていた。

そうして動けないままに、咲良からふつと力が抜けた。

「……咲良？」

咽に張り付いて出なかつた声が、ようやく唇を滑る。だけど返事はなかつた。代わりに規則正しい寝息が聞こえて嘆息する。私に覆い被さつたまま、眠つてしまつたようである。

起き上がるうとすると、脱力しきつた咲良が私の上から滑り落ちる。このままではソファから転落してしまつので、慌てて両手で彼

の体を抱える。ここで田が覚めれば、さぞ可愛い反応をしてくれることだろうが、何をしても田覚める気配は全くなかった。

「……私の負けだ」

眠る咲良の顔は、いつもの通りあどけなくて可愛らしかった。だけどそんな彼をつい抱き締めてしまったのは、弟の面影を見たからでも、その愛くるしさからでもないことは、認めざるを得なかつた。

だから、私の完敗だ。

第三部 第十七話 幕引き～レインハルト視点

エンズレイ家次男。それはオレにとつて烙印に等しかった。

生まれた瞬間から下等生物だと突きつけられたのだ。エンズレイはハーシェンの影。覇權とは縁のない日陰の家名。だが、その日陰の頂点すらも兄上に譲らなければならなかつた。

どれほどの才能も努力も無意味な、下らない世界。

「影より光が勝つてゐるなど誰が決めたの？ 夜は毎日訪れるというのに」

そんな下らないオレの世界に光を差したのは、闇色をした女だった。

頂点は余りにも低いところにあつた。

エンズレイのそれすらも諦めたことがあつたなど、今となつては馬鹿らしい。ヴァルグランやフレンシアさえ今のオレには小さな国ひとつでしかない。木偶人形のように足元に転がるのが、今まですべての頂点に君臨していた者だというのだから。

「笑えるな。こんな臆病者の國を、今まで恐れて踊つていたなど」

そう口にすれば、実際に笑いがこみあげてきた。こんな茶番劇があるだろ？ これなら今まで戦で剣を交えた中にもう少しマシな者はいた。

一夜にして國を滅ぼすだの永劫を生きるだの、思いだすにつけ笑いが止まらない。こんなに脆いものが一体どうしてそこまで人々を畏怖させ、國々の上に君臨したのだろう。

そう考えたときふと笑いは止まつた。

その噂が本当だとすれば、まだ皇帝は死んではない筈だ。フレンシアの魔女」ときでも蘇るものを、かのルゼリア皇帝陛下ができぬわけもない。思いなおして足元を注意深く見下ろすが、さつきまではぶつぶつと呻いていた皇帝は、どう見ても完全に事切っていた。「おい、まさか本当にこれで終わりか？ ルゼリアの奇跡の力とやら、オレはまだ見ていないぞ」

爪先で小突いてみても、何の変化もない。それで確信した。どんな理由があつても、頂点を見たものがこんな屈辱を甘んじて受ける筈もない。だが皇帝の死を確信したところでオレに沸いたのは今度は笑いではなく、どうしようもない怒りだった。

「こんな……、こんなものか。こんなにも脆いものに、今までオレ達は踊らされてひれ伏してきたというのか！」

体の内側から沸き起こる衝動に任せて、木偶人形を踏みつける。だがどれほど痛めつけても怒りは消えなかつた。ただどうしようもない憤りと虚しさを引き連れてくるだけだ。

こんなものが、今まで眩しくて見えなかつた頂点だと。手が届かないと思つていたものなのだとと思うと眩がしそうだつた。

ああ。確かにあいつは正しかつた。

例え影だろうが日陰だろうが、オレが『弱者』である理由にはならない。

狂うかと思うほどの激情がゆっくりと収まつていぐ。別に怒る必要などなかつた。全てを手に入れたかったのは、霸者になりたいわけではない。こんな下らない世界の霸權など、オレにとつてはとうにどうでも良いことになつていて。

「下らん。こんな上辺だけの帝国を恐れる陛下も、無血主義の弱々しいフレンシア国王も、臆病者のルゼリア皇帝も……どいつもこいつも下らん。ならば俺がこの玉座におさまるのが一番ふさわしいと思わないか？」
「フレオノーラ」

オレにとつて唯一意味のある名前を呼ぶ。ここまでは全てオレの望んだ通りだ。だが振り向いた先にあったのは、それとはかけ離れ

たものだつた。

「いまやルゼリアさえもがオレの前にひれ伏したといふの……、お前は何故そなんだ」

心を落ちつけたのと同じ筈の群青色が、今度はさつきよりも激しく心をかき乱す。

酷く冷えた瞳。 いつからだつたか。 お前がそういう視線しかオレに向けなくなつたのは。

その言葉を噛み殺して、皇帝の体を踏み越える。皇帝も玉座もなんの価値もない。階段をおりながら、エレオノーラの冷えた群青の瞳に端的に問いかける。

「一体俺の何が不満だ？」

「不満などない。だが頭で納得しても、体を従えても、心がなびかぬ」

答はすぐに返ってきた。決して認めたくない、理解したくもない答が。ぎり、と奥歯が軋む。

「ならば何故、魔女紛いの男などに心を碎く？ まさか本当に籠絡されたのか？」

「それを言つなら、お前こそ何故そんなに私にこだわる。籠絡した覚えはないのだがな」

エレオノーラが一步後退する。考えてこることなど手に取るようにな解る。この期に及んで、オレと戦おうとこゝのだろう。

全てが思い通りになると思うほどオレは浅はかでも傲慢でもない。そんなことは産まれたときから知つていい。どんなに取り繕おうともオレは劣等感の塊だつた。だが手に入れたいと望めば、どんな不可能でも必ず手が届く時は来ると、そう信じていただけだ。そうしてオレは頂点をも手に入れた。

なのに、どうだ。

実際に手にいれたかつたものは、どんどん遠ざかっていく。

そして、オレよりも何も持たぬ男が何の労力もなく攫つていく。

戦つてきたのも強く在ろうとしたのも、頂点に立ちたかったのも

全ては オレにその強さをくれたたつた一人の女の為だった。なのに今同じ女が、そんな理不尽を突きつけてオレの全てを壊そうとする。こんなにもオレを翻弄して、籠絡した覚えがないなど……お前は本当に、笑わせてくれる。

「……されているさ。十数年も、オレは……」

影より光が勝つているなど誰が決めたの？ 夜は毎日訪れるところに。

十数年経つても、その声も、その瞳も、その髪も、色褪せない。いつでもそれがオレの全てだった。

だからこそ、許せない。どうしても譲れない。

隙を見せてやると同時に、エレオノーラが走る。こんなにも解っているのだ。 強さを全て自分で決めてしまつお前が、オレになびくことなど絶対にないと。解っているのだ。

「お前はオレに逆らうことしかしない」

「お前はそれをただの一度も受け入れはしないじゃないか」
エレオノーラの手が剣を握るその手前で、剣を蹴り飛ばす。勝敗がついたのに、髪を掴んで引きずり上げても、彼女の目は力を失わずにオレを射抜く。最後の最後まで逆らい続けることを知っているに止まれない。そんなオレはさぞ無様なことだろう。それを自覚して、ようやく利きかけた歯止めは次の瞬間吹き飛んだ。

「ツ、やめ

世界も生きることも最早どうでもいい。だが、誰かにくれてやることだけは、どうしても許せない。

「ならば、お前の心にオレだけが残るまで、それ以外の全てを奪つてやる」

どんなに無様でも構わなかつた。

オレが走ると同時にエレオノーラも走る。それを気配で感じながら、剣を握り直す。

こんなに心が乱れているのに頭は冷静だった。やはり解つてしまつのだ。お前はどうせ、身を挺して、お前の心を奪つたものを底お

うとするのだね。

大嫌いだ。

オレよりもずっと強いくせに、簡単に自分の身を投げ売るお前が、ずっとずっと大嫌いだった。そしてそれを全て凌駕するほど、愛していた。

……殺してしまおうか。恐らく、手に入れられる方法はもうそれだけだ。

けれど葛藤する必要もなかつた。殺せるわけがない。

殺すつもりで振り下ろした剣は意志とは関係のないところで止まつた。

このオレが愛した者が幸せを得ぬまま果てる世界など、認められるわけがない。

記憶と違わぬ声に名を呼ばれ、記憶のままの瞳がじりじりを向く。驚く程満たされた。

どれほど近づいてもどんなに抱いても決して満たされることない思ひが、こんなに簡単に。

さあ、幕引きだ。

オレは全てを手に入れた。

第三部 第十七話 幕引き～レインハルト視点（後書き）

ありがとうございました。リクエストがあつたり、気が向きましたら気まぐれに追加しようと思っていますので、とりあえず完結済にはしないでおこうと思います。別視点リクはもつしばらく受付中なのでよろしければメッセージや拍手などからリクしてやって下さい。

(一)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151t/>

IN BLOOM ~聖少女と黒の英雄~ 番外編集

2011年11月9日03時19分発行